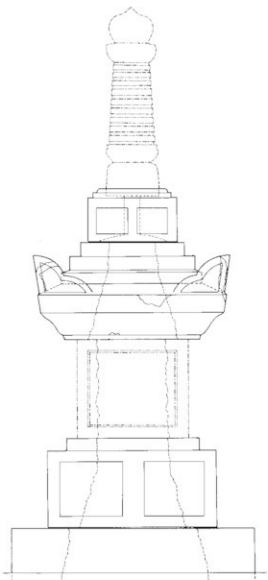
松本市四賀地区の中世石造物

— 殿村遺跡調査事業に係る調査報告書 —



2017

松本市教育委員会

1　金子家墓地

2　廣田寺　板碑

3　保福寺　無縫塔

口絵 1

1　川久保家墓地

2　内藤家　薬師如来坐像

3　にごみ堂跡　宝篋印塔相輪

4　久保家墓地　茶臼

5　草間家　宝篋印塔屋蓋

6　五輪平

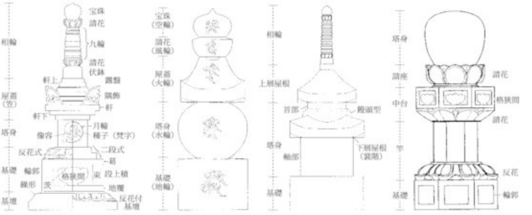
7　中原家墓地

8　光久寺　宝篋印塔

口絵 2

例　言

1　本書は平成 27・28 年度殿村遺跡調査事業に係る松本市四賀地区の中世石造物調査の報告書である。
2　現地における調査は平成 27 年 4 月 7 日に開始し、平成 28 年 11 月 1 日に終了した。
3　本書の執筆、及び作業は以下の分担で行った。
　第 1 章：事務局、第 2 章：宮島義和、第 3 章：浜野安則・宮島義和（無縫塔、板碑）、第 4 章 1 ～ 3：浜野安則、同 4：宮島義和
　その他、付編として浜野安則氏の論考を掲載した。
　石造物実測：浜野安則、宮島義和、原田健司（板碑）、石造物写真撮影：浜野安則、宮島義和、宮嶋洋一（板碑）、石造物採拓（拓本）：浜野安則
　挿図トレース：浜野安則、原田健司（板碑）、版組（DTP）：福嶌彩子
4　本調査で対象とした主な中世石造物および各部材の名称は以下のとおりである。



宝篋印塔　　五輪塔　　多宝塔　　無縫塔（重制）

5　図中におけるトーンの意味は薄いアミが欠損部分、濃いアミが別材を示す。
6　図中における実線以外の線で、破線は復元線、一点鎖線は推定される部材を示す。
7　第 3 章中の各地点の地図の縮尺は 25000 分の 1 である。
8　石造物の年代判定の基準は、近年の石造物研究の成果を全国的にまとめた「中世宝篋印塔事例集成（その 1 ～ 5）」（坂詰秀一監修『石造文化財への招待』2011）などの編年観をもとに、長野県内の紀年銘のある石塔の形態などと勘案して判断し、14 世紀前半から 16 世紀後半までを半世紀ごとに分けて表記した。
9　石塔の大きさは、石塔の最大幅で 30cm 以下を小型、30 ～ 45㎝を中型、45cm 以上を大型と表記した。
10　現地調査から本書作成までの間、以下の方々から協力・助言・指導を得た。なお調査指導委員等関係者については第 1 章に記した。
　青木秀貴、市川恵一、稲垣　勉、岩渕世紀、大澤慶哲、小口正治、金子　孝、上條治徳、川久保福美、木下辰男、草間伊知郎、久保安俊、久保田恵美子、久保田佳弘、熊谷道応、小桜　敏、真田忠昭、滝沢正行、武川　靖、内藤喜章、中原勝元、西澤功太、野村宗芳、坂西深志、降旗和雄、降籏恒明、堀内美代子、矢花増治、山下徹静、山下泰永、山本　茂（50 音順）

目　次

口絵
例言・目次
四賀地区中世石造物分布図
第 1 章　調査事業の概要
　第 1 節　調査の経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
　第 2 節　調査体制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第 2 章　調査の方法
　第 1 節　調査方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
　第 2 節　調査範囲 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
第 3 章　調査の成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
第 4 章　調査のまとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
付編　松本市四賀地区における中世石造物の造立とその変遷・・・・・・・・・浜野安則 ・・・・・・・・・・・・・ 53
付表　調査石造物一覧

S＝1：50000
0 500 1000 1500 2000 2500m
四賀地区中世石造物分布図
01
02
03
04
05
06
07
08
09
10
11
12
13
14
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
中川手
明科町
四賀村
錦部
中屋敷
塩沢
矢久
大沢
吉澤
大洞山
虚空蔵山
御嶽山
入山
長峰山
大日沢
田沢
一条峰
戸谷峰
六人坊
三才山

第１章　調査事業の概要

第１節　調査の経緯

１　殿村遺跡調査事業

平成 20 年の四賀小学校建設に伴う発掘調査で室町時代の石積を伴う平場跡が検出された殿村遺跡について、平成 21 年に現地保存が決定した。中世城館、あるいは中世寺院などの宗教施設の可能性を示す大規模造成遺跡について、保存決定以後の将来的な活用方法を探るためには、遺跡の範囲・内容を確認するための継続的かつ広範囲にわたる調査が必要との判断に達し、文化庁および長野県教育委員会の指導のもと、翌平成 22 年度に考古学、文献史学、環境史などの専門家６名による殿村遺跡調指導委員会を発足して、平成 29 年度までの計画（現在平成 30 年度まで延長）で「殿村遺跡調査事業」に着手した。

第１回委員会では、殿村遺跡をとりまく歴史的景観の重要性、特に中世以前における虚空蔵山麓一帯には宗教空間が広がっていた可能性が高く、殿村遺跡はその空間の中に所在する宗教施設の一つではないかという点について各委員からの指摘を受けることとなった。その上で殿村遺跡の性格解明のためはこの宗教的空間全体を対象とした総合的な調査が必要との結論に達し、殿村遺跡の発掘調査を柱に据えつつ、周辺の城館跡、景観、社寺・信仰資料等の調査を実施していく調査事業の方向性が固まった。

２　四賀地区の石造文化財

四賀地区は近世以前にさかのぼる石造文化財が非常に多い地域として知られる。旧四賀村教育委員会は平成４年に『四賀村の石造文化財』を刊行した。四賀地区内の石造物の悉皆調査の成果であり、地区ごとに詳細な位置図とともに収録されている石造文化財は多種多様である。その中には明らかに中世までさかのぼり、殿村遺跡と時代が重なると推定される五輪塔や宝篋印塔が数多く見受けられた。しかし同書では写真の収録に主眼が置かれたためか、個々の石造物の年代観が示されておらず、加えて実測図や寸法などの詳細な情報や解説もほとんど付されていなかった。そうした中、平成 22 年に浜野安則氏により「長野県中信地区の中世石造物－石塔から見えてくる信仰と文化－」（『信濃』62 巻１号）が発表され、四賀地区には会田川や保福寺川、あるいは古道に沿った地域に、中世の多宝塔・宝篋印塔・五輪塔等の石塔が濃密に分布することが初めて指摘された。

３　中世石造物の踏査

松本市教育委員会では上記の事実に基づき、殿村遺跡の発掘調査と並行して地区内の中世石造物の確認を行った。その結果、浜野氏の指摘のごとく五輪塔・宝篋印塔・多宝塔、加えて既出資料として板碑からなる４種類の中世石造物が存在することを追認し、さらに『四賀村の石造文化財』にも掲載されていない未報告資料もいくつか存在することが判明した。この踏査により、松本平では希薄なこれらの石造物が、虚空蔵山麓をはじめとする会田盆地に濃密に分布することをあらためて確認し、地域の宗教空間をテーマとする殿村遺跡調査事業においてとりわけ重視すべきものであるという認識に達した。

そこで、地区内の石造物についてあらためて詳細な記録を伴う調査を実施し、分布や立地、形式や構成等の基礎的な情報を明らかにした上でその年代観や変遷、造立目的や主体者などを考察するめ、『四賀村の石造文化財』と浜野論文を基礎資料として、平成 27・28 年の２年計画で現地調査を行い、調査報告書を刊行することとなった。

第２節　調査体制

本調査は、殿村遺跡調査事業に係る総合調査の一環として行った。松本市としては初となる中世石造物を対象とする詳細調査を実施するにあたり、発掘調査とは別に調査班を置き、現地調査から室内整理作業まで一貫して計画的に進めることとした。また、調査にあたっては殿村遺跡調査指導委員会、特に水澤幸一・中澤克昭委員から指導を受け、調査の更なる充実に努めた。調査体制は以下のとおりである。

＜平成 27 年度＞

調査担当　宮島義和（研究専門員）
調　査　員　市川恵一、浜野安則
事　務　局　松本市教育委員会文化財課
内城秀典（課長）、直井雅尚（課長補佐・埋蔵文化財担当係長）、竹原　学（課長補佐・史跡整備担当係長）、櫻井　了（埋蔵文化財担当主査）、吉見寿美恵（同嘱託）

殿村遺跡調査指導委員会
委員長　笹本正治（信州大学副学長）
委　員　小野正敏（前大学共同利用法人人間文化研究機構理事）
辻　誠一郎（東京大学大学院教授）
中井　均（滋賀県立大学教授）
中澤克昭（上智大学准教授）
水澤幸一（新潟県胎内市教育委員会生涯学習課文化財係長）

＜平成 28 年度＞

調査担当　宮島義和（研究専門員）
調　査　員　浜野安則
事　務　局　松本市教育委員会文化財課
木下　守（課長）、直井雅尚（課長補佐・埋蔵文化財担当係長）、竹原　学（課長補佐・史跡整備担当係長）、櫻井　了（埋蔵文化財担当主査）、福嶌彩子（史跡整備担当主事）、吉見寿美恵（埋蔵文化財担当嘱託）

殿村遺跡調査指導委員会
委員長　笹本正治（長野県立歴史館館長）
委　員　小野正敏（国立歴史民俗博物館名誉教授）
辻　誠一郎（東京大学大学院教授）
中井　均（滋賀県立大学教授）
中澤克昭（上智大学准教授）
水澤幸一（新潟県胎内市教育委員会生涯学習課文化財係長）

第２章　調査の方法

第１節　調査方法

１　調査方針

本調査は四賀地区中世石造物の悉皆調査を目的とした。従って、次節に挙げた調査地点に存在する全ての中世石造物を調査対象とし、現状で組み合わされている状態から可能な限り部材１点ずつを分解して取り出したうえで、寸法等の計測、実測図、拓影、写真撮影等を記録することを前提とした。実際には以下の手順で調査を行った。

２　調査手順

⑴　事前準備

ア　石造物の所有者・管理者への連絡・訪問による調査依頼（調査および分解・清掃等許可）

イ　現地下見による調査対象地点の決定と聞き取り調査の実施

ウ　所有者・管理者との調整（文書による調査依頼と日程調整）

⑵　現地調査

ア　調査前の写真撮影

イ　調査地点へのコード番号付与（01 ～ 34）

ウ　石塔の部材ごとの分割

エ　部材のクリーニング

オ　各部材への番号付与（コード番号 - 部材番号、例 03-02）

カ　各部材の写真撮影

キ　調査カード作成（場所・部材名称・法量計測・石材推定・時代推定・所見）

ク　実測（部材によって考古学的実測と左右対称を基本とする建築学的な実測を併用）

ケ　採拓（必要な部材のみ）

コ　原状復帰作業、調査終了後写真撮影

サ　関係者への聞き取り（家、墓地、堂などの由来・伝説）

⑶　室内整理

ア　調査台帳の作成（調査カードをもとに写真と組み合わせ部材ごとに作成）

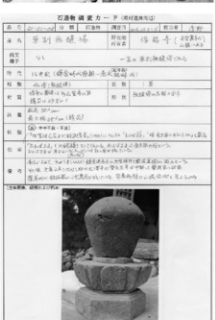
イ　実測図製図作業

ウ　実測図トレース

エ　調査報告書の作成

⑷　文献調査

特に長野県内の発掘調査事例を報告書等で調査し、火葬墓との関係や造立主体の想定の参考とした。また全国的な中世石造物研究に係る文献調査を行い、地域的な特性をつかむとともに、編年研究、石工と石材等について認識していく上での参考とした。



第２節　調査範囲

１　四賀地区（会田盆地）

四賀地区は、旧４カ村の錦部、中川、会田、五常地区からなる。保福寺川上流域、保福寺町から刈谷原までの狭い河谷と谷幅を広げ会田地区の板場に接続する反町までの長大な領域を形成する錦部地区、高低差のある段丘を両岸に形成する会田川沿いと、両瀬沢など虚空蔵山南麓の支谷からなる会田川上流域の中川地区、会田川と保福寺川の合流点に発達した沖積地と河岸段丘に加え、岩井堂沢などの広い支谷からなる会田地区、その西に続き再び狭い河谷と支谷からなる会田川中流域の五常地区というように、各地区における地形的景観は異なった表情を見せている。歴史的には、地域全体の特徴として古来会田盆地を通過する幹線道とそれに次ぐ地域間を繋ぐ道に沿って町や村が発展してきたといえる。錦部地区は保福寺川沿いを通過して松本と小県を結ぶ古東山道（後の保福寺街道）と、錦部から分岐し会田を経て北に向かう東山道支道に沿った地域であり、中川から五常地区までは会田川に沿って東西を結ぶ間道的な道が地域を規定し、中間の会田地区は二つの道が交わり最も町が発達した交通の要衝といえる。

このような地域的特性を踏まえたうえで、本調査では『四賀村の石造文化財』所収の石造物に踏査で新たに確認したものや情報提供者からの指摘で存在を確認したものを加えて、４地区 19 地点（コード番号 01 ～ 20、15 は欠番）を選定した。一方、『四賀村の石造文化財』の掲載写真が約 1,800 件であるのに対し、旧四賀村教育委員会が昭和 59 年から４年間にわたって行った調査では 2,800 件に及んでおり、その一覧表（『四賀村石造文化財調査書』）と調査台帳と添付写真を確認した結果、保福寺の無縫塔をはじめ２地区 10 地点（21 ～ 30）が新出となり、これを第２次調査の範囲とした。

２　周辺地区

今回の調査では行政界を越えて、同じ会田川に沿った下流域として五常地区の西に続き、さらに犀川右岸まで至る安曇野市明科地区（31 ～ 34）についても、以下の理由により調査範囲に加えることとした。

（1）事前踏査によって安曇野市明科地区内の犀川右岸に宝篋印塔等が存在することが判明したこと

（2）発掘調査においても中世石造物が出土していること

（3）文献資料や系図、伝承によって明科地区（塔原・田沢・光）は中世において会田と密接な関係にある会田海野氏・会田岩下氏の勢力範囲（会田御厨）と推定できること

なお、上記の調査範囲以外についても、必要により参考となる場所や石造物の予備調査を行った。特に、中世石造物の石材として多用される多孔質安山岩は、四賀地区周辺では産出しない。今後の課題として石材の正確な鑑定を待たなければならないが、東信地方から搬入された可能性が高いことから、上田市真田の日向畑遺跡の宝篋印塔・五輪塔の実見、同実相院宝篋印塔（県宝）の実測を行った。また、四賀地区に隣接する麻績村の石造物、犀川左岸をはじめ、佐久市・東御市・青木村・長野市・麻績村・筑北村・大町市・茅野市・駒ケ根市の中世石造物の視察を行い、調査の参考とした。

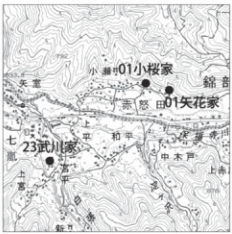
四賀地区と周辺地区で調査の対象とした中世石造物の数を地区別・部材別に下表にまとめた。

第１表　調査石造物の地区別・種別集計

地区		地点数	宝篋印塔部材	五輪塔部材	多宝塔部材	無縫塔部材	板碑	多層塔部材	石仏	その他	計
四賀	錦部	4	6	2	0	4	0	0	0	0	12
	中川	12	16	7	1	0	0	1	1	0	26
	会田	7	35	24	4	3	2	0	0	1	69
	五常	6	41	9	1	0	0	0	0	2	53
周辺	明科	4	18	5	0	0	0	0	0	0	23
計		33	116	47	6	7	2	1	1	3	183

第３章　調査の成果

本章では中世石造物の調査の結果とそこから得られた成果について、各調査地点の立地・環境や伝承・歴史的景観などを踏まえながら報告していくこととする。なお、調査した個々の石造物全てについて記すことはできないため、巻末の付表にまとめた。



地図１　赤怒田・七嵐

01 赤怒田　矢花・小桜家　（図版１）

立地・環境　近代の錦部村、近世の赤怒田（あかんた）村。東西に流れる保福寺川の中流、右岸山際に集落を形成。保福寺川の左岸には東山道が通っていた。［地図１］

所有者・所在場所　矢花増治家、自宅裏の山中に山の神と一緒に祀る（写真１）。小桜敏家、宅地内のスギの根本に覆屋を掛けて祀る（写真２）。

伝承・歴史的景観　両家とも現在の墓地は近くの地蔵堂跡にある。矢花家は昔は対岸の中木戸にいて、山城を守る武士であったが帰農したと伝え、近年まで中木戸の観音堂を守っていた。両家とも宝篋印塔が何であるか知らないが、先祖の信仰に関わるものであるとの認識はある。

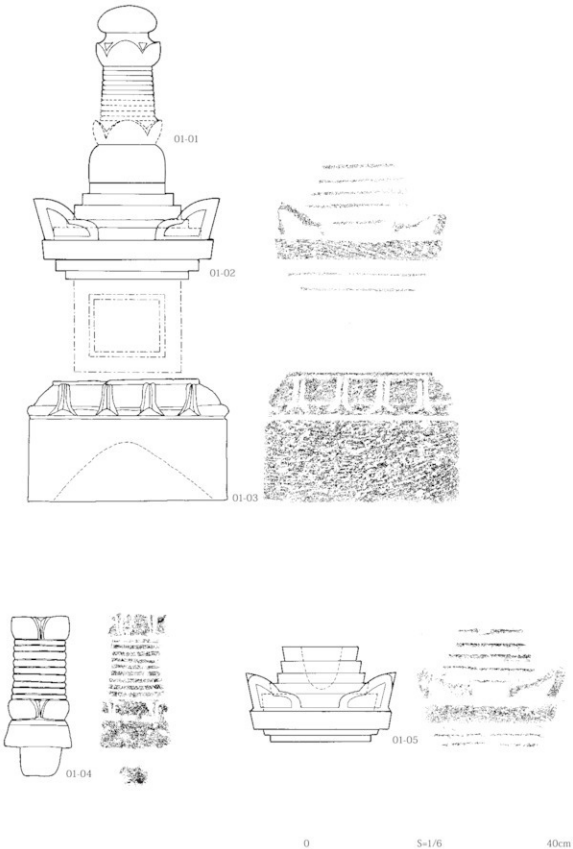
石造物の種類・数量　矢花家＝宝篋印塔の部材３個、小桜家＝宝篋印塔の部材２個。

写真１

解説・製作年代　矢花家の宝篋印塔は相輪 01-01、屋蓋 01-02、基礎 01-03 からなり、塔身を欠くが一具とみられる。石材は多孔質安山岩で黒色を呈する。相輪は宝珠が扁平で、請花との間に丈長な篠首（しのくび）（細い首）をつくる。大ぶりな請花は間弁の入る単葉４弁。九輪は粗い条線で刻み、６条から下を欠損し、やはり大ぶりな下部請花と伏鉢にモルタルで接着している。屋蓋は軒上５段、軒下２段、各段高が低いので全体に扁平な感じがする。隅飾は二弧外反で、下辺を除き輪郭を回し中を彫り窪める（以下特記しないかぎりは同様）。軒端も内傾（上端より下端の幅が狭い）する。基礎は段形はつくらず、側面の４分の３の高さに沈線を刻み、上部を反花座とする。蓮弁は単弁で角に１弁、平に３弁を沈線で刻む。反花座の下は素面とし、工具跡が残る。底面には径 25cm、深さ 12cm の孔を粗く穿ち、重量軽減孔と考えられる。加工の粗さはあるが、基礎の幅は 32.3cm と決して小型ではなく、一具の製作は 15 世紀中頃を下らない時期と判断される。

写真２

小桜家の宝篋印塔は、相輪 01-04 と屋蓋 01-05 からなり、塔身と基礎を欠くが一具とみられる。石材は白い石英粒の交じる多孔質安山岩で黒色を呈する。相輪は宝珠を欠くが伏鉢下の枘まで残る。上下の請花は間弁の入る単葉４弁。九輪は薬研状の条線を刻む。屋蓋は軒上５段で、段の立ち上がりは内傾する。軒下は２段で、軒端も内傾する。隅飾は二弧外反。上部に枘孔を穿つが、径 7.0cm、深さ 7.1cm と相輪の枘よりも深く、奉籠孔を兼ねると考えられる。屋蓋は幅 22.1cm と矢花塔より一回り小型ながら、小桜塔はつくりが丁寧な印象を受け、15 世紀中頃までの製作と判断される。



図版１　石造物実測図・拓本（１）

02 沢屋　金子家墓地（真正寺跡）（図版２・３）

地図２　板場

立地・環境　近代の錦部村、近世の沢屋村。保福寺川の左岸段丘上に位置し、錦部で分かれた古代・中世の東山道北陸支道、近世の北国西往還（善光寺街道）の沿線にあたる。［地図２］

所有者・所在場所　金子孝家、真正寺跡の墓地（口絵 1-1）。

伝承・歴史的景観　周辺には中世に真正寺という寺があり、中世末には廃絶したと伝えられる（小口正治氏所蔵文書）。西隣の畑の字は「真正寺」である。墓地に隣接する田中家では、毎年４月 28 日に「五輪様のお祭り」と称して、箱灯籠を立て、石塔に生米と線香を供え供養をしている。金子同姓５軒はこの祭りは知らない。金子同姓は現在、墓地を近くの河岸段丘崖に設けている。

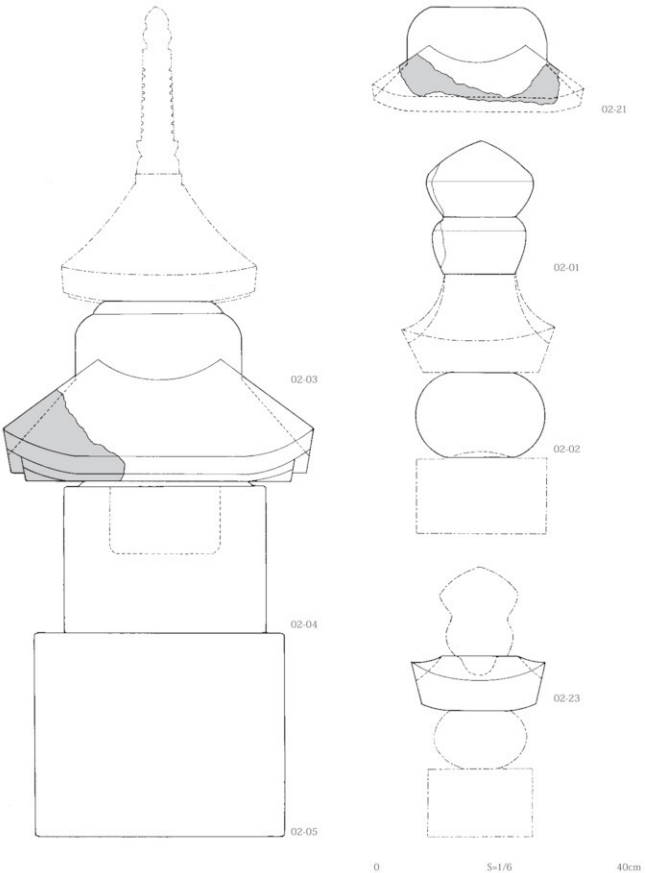
石造物の種類・数量　中型多宝塔の部材３個（１基分）、小型多宝塔の部材１個、宝篋印塔の部材 11 個、五輪塔の部材 15 個、計 30 個。

解説・製作年代　中型多宝塔は下層屋根 02-03、下層軸部 02-04、基礎 02-05 からなり、上層屋根と相輪を欠くが一具である。石材は地元の小川層砂岩とみられる。大きさは下層屋根の幅 40.4cm、基礎の幅 40.2cm を計り、石塔全般の分類では中型に入るが、四賀地区周辺では最大級の塔である。多宝塔は平面方形の下層軸部に平面円形の上層塔身（首部）を載せるため、その収まりに下層屋根に饅頭型をつくるのが特徴である。この金子塔も立ちの高い円形の饅頭型をつくり出し、上部には上層塔身（首部）の勾欄を表わす括りを刻んでいる。また屋根の軒には垂木型が一段ある。その下の下層軸部は幅 32.8cm、高さ 22.3cm で、下層屋根を持ち上げると方 18.0cm、深さ 11.5cm の箱形の掘り込みが施されていた（写真３）。中には人骨などは確認できなかったが、納経または納骨のための奉籠孔と思われる。孔の縁には幅 4.5cm、高さ 0.5cm の框（かまち）を回している。その下の基礎は幅 40.2cm に対して、高さ 27.5cm と立ちが高い。下層軸部とはコンクリートで固められ、上面は観察できない。

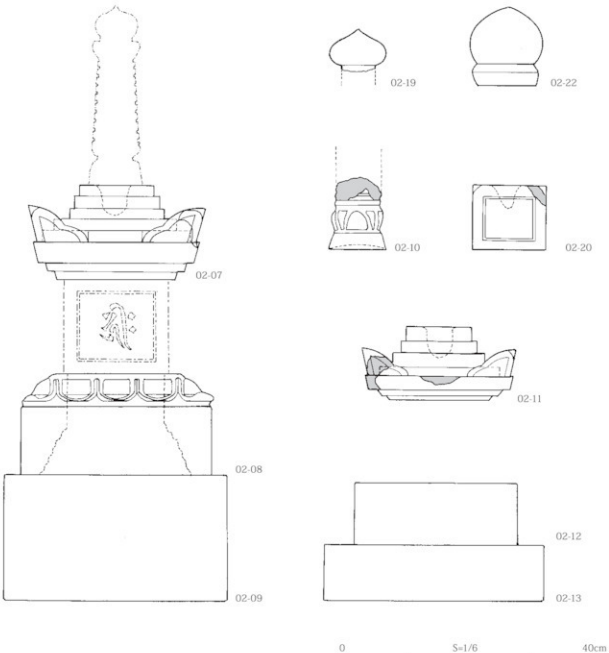
多宝塔の類例としては、弘長２年（1262）銘のある上田市別所温泉の常楽寺多宝塔（重文）がよく知られるが、さらに近縁な例として東筑摩郡麻績村の海善寺多宝塔（凝灰岩製）がある（浜野 2010）。こちらは下層屋根の幅 74.6cm と大型であるが、塔の形態や、凝灰岩と小川層砂岩というともに軟質石材を使用している点が類似する。海善寺多宝塔は 13 世紀後半（鎌倉中期）の製作とされるが、その上層および下層の屋根の軒が垂直に切れているのに対し、金子塔はやや内傾しているため、その製作は 14 世紀前半（鎌倉後期～南北朝前期）と判断される。

もう１点の多宝塔下層屋根 02-21 は、現状幅 27.0cm（推定幅 30cm 程度）と小型で、安山岩製。上下をコンクリートで固められ観察はできないが、多宝塔に特有な饅頭型と屋根四方の降棟は明らかである（写真４）。製作は 14 世紀後半と考えられる。こうした小型の多宝塔はこれまで五輪塔の部材に紛れていたが、数は多くないものの各地で見出されていて、四賀地区周辺でも他に２基（05-02、10-02）が確認された。この２基の製作は 15 世紀後半と考えられる。石造多宝塔は全国的にも類例が少ないとされ、今回の四賀地区周辺の石造物の中でも特異な事例である。

宝篋印塔は相輪 02-10（下部）、02-19（頂部）、02-25（下部）、02-29（頂部）、屋蓋 02-07、02-11、塔身 02-20、基礎 02-08、基壇 02-09、02-12、02-13 がある。石材は多孔質安山岩。屋蓋 02-07 は軒上５段、軒下２段を刻む。軒端は内傾するが、二弧外反の隅飾の反りは少ない。基礎 02-08 は屋蓋 02-07 と一具とみられ、側面上部の反花座は矢花家の宝篋印塔基礎 01-03 とよく似る。上面から底面まで粗い加工で孔が貫通している（写真５）。これは火葬骨を納める奉籠孔を最大限に大きく取った結果と考えられる。上田市真田町の日向畑遺跡の発掘では、宝篋印塔の基礎内に箱形の奉籠孔を穿ち火葬骨が納められた例と、地下に火葬骨が埋納された例とが確認された（真田町教委 1973）。金子家の場合は、火葬骨の塔内納骨から地下への埋納へと移っていく過渡期の例であると考えられる。製作は 15 世紀前半と判断される。塔身 02-20 は幅 11.0cm と小型で、二重輪郭を回し中を 0.3cm 彫り窪めるが、種子は刻まない。上面に径 3.3cm、深



図版２　石造物実測図・拓本（２）



図版 3　石造物実測図・拓本（3）

写真 3

写真 4

写真 5

さ 1.5cm の円孔を穿っている。二次加工されたものと思われる。15 世紀後半の量産品であろう。その他の部材は 15 世紀前半の製作と考えられる。

五輪塔は、多孔質安山岩製では空風輪 02-14、02-22、水輪（破片）02-32 がある。形は整っており、製作は 15 世紀前半と判断される。砂岩製では空風輪 02-01、02-06、02-17、02-28、02-30、火輪 02-15、02-23、02-24（？）、水輪 02-02、02-31（？）、地輪 02-16、基壇（？）02-18 がある。空風輪は 02-30 を除き地方色が顕著である。火輪 02-23 は四隅の降棟の先が跳ね上がり、小県郡青木村夫神の文明 16 年（1484）銘五輪塔（上田市博物館 1984）に近い形態である。安山岩製と砂岩製の時間的差異は第 4 章で述べるが、要は東信から安山岩製の石塔が入りにくくなり、地元の砂岩で地元の石工がつくったコピー品であると考えられる。したがって製作は 15 世紀後半以降と判断される。

03 板場　小口家御塚堂　（図版 4）

立地・環境　近代の会田村、近世の板場村。保福寺川の左岸にあり、善光寺街道が南北に抜けている。［地図 2］

所有者・所在場所　小口正治家。宅地裏手の山林斜面内の「御塚堂」に近年は覆屋を掛け（写真 6）、「五百五十年之碑」という先祖顕彰碑を建て祀っている。

伝承・歴史的景観　2 基ある石塔のうち向かって左塔は初代夫婦の墓で、基壇に夫は文明元年（1469）、妻は文明 3 年（1471）の没年が刻まれる。右塔は第二代の墓で、基壇に夫は大永 2 年（1522）、妻は天文 9 年（1544）の没年が刻まれる。第三代は埋橋（松本市）に養子に出、第四代は文禄元年（1592）に没し近くの小口家墓地に笠塔婆がある。この地の字は「山伏の塚」という。中世に石塔が造立された後に、小口家の祖先が中世の部材に近世の石材を組み合わせ、初代と二代の祖霊塔として祀ったものと考えられる。

石造物の種類・数量　祖霊塔 2 基を構成する中世部材は宝篋印塔の部材 4 個、五輪塔の部材 1 個。他に五輪塔の部材 2 個、その他 1 個。

解説・製作年代　中世の部材は左塔の宝篋印塔相輪 03-01、五輪塔火輪 03-02、宝篋印塔塔身 03-04、右塔の相輪下部 03-06、宝篋印塔基礎 03-09 で、石材は火輪 03-02 の砂岩以外は多孔質安山岩。残りは近世の砂岩による部材を組んでいる。左塔の相輪 03-01 は頂部の宝珠・請花、下部の請花・伏鉢を省略した形式で、九輪は浅い条線で刻み、底に枘をつくる。火輪 03-02 は厚い軒の下端は水平だが軒上は大きく反る地方色の強いもので、上の相輪を請ける枘孔を穿つ。塔身 03-04 は幅 14.1cm と小型で、二重輪郭を回し中を彫り窪めるが、種子は刻まない。右塔の相輪下部 03-06 は九輪から上を欠失した請花と伏鉢で、請花には間弁のある単葉 4 弁が刻まれる。基礎 03-09 は上に 1 段を設け、側面は 2 区に分かつ関東式の基礎である。いずれも 15 世紀後半の製作と判断される。この他に砂岩製の五輪塔水輪、同じく三角五輪塔とみられる火輪 03-12、多孔質安山岩製の石臼（推定径 30cm、03-13）のいずれも残欠が一緒に置かれている。

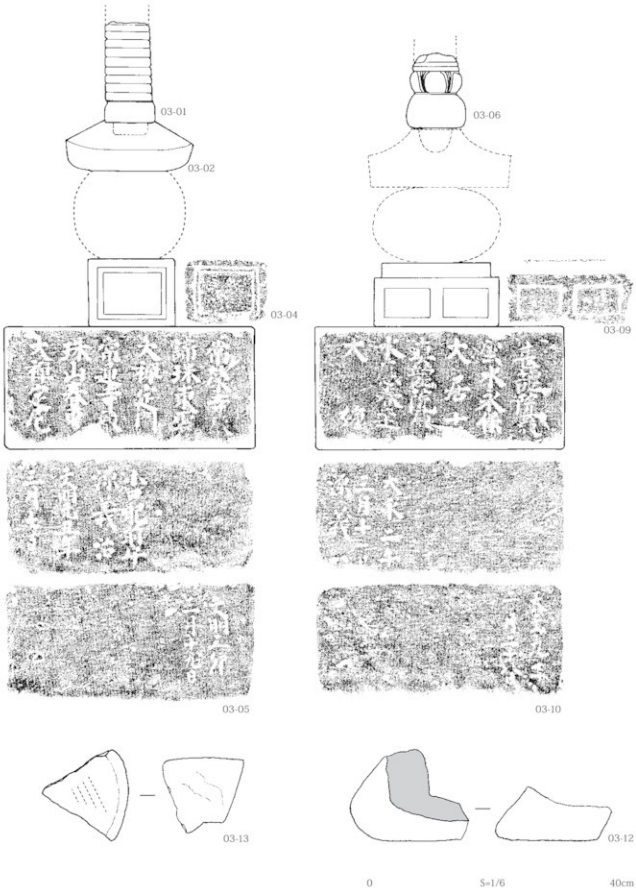
写真 6　小口家御塚堂

04 矢久本村　西澤家　（図版 5）

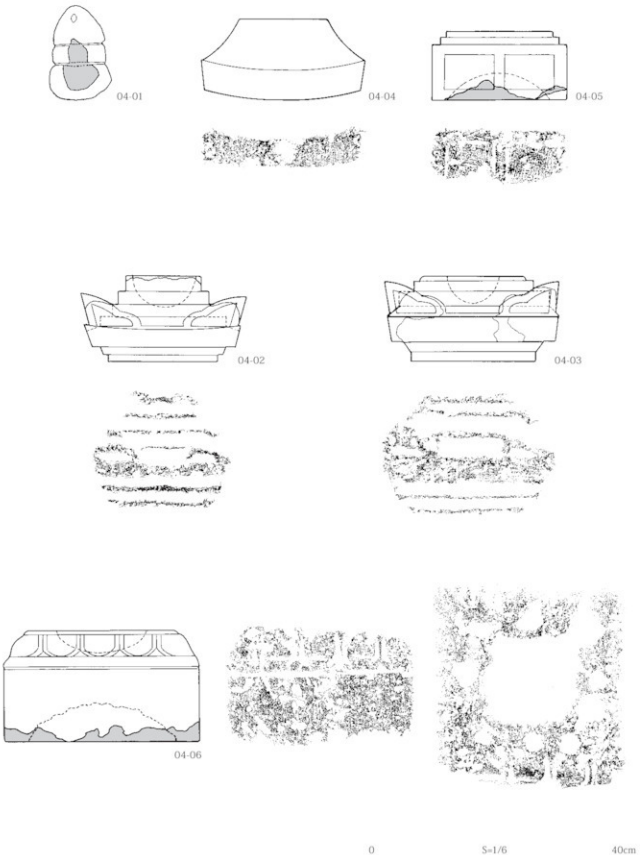
立地・環境　近代の中川村、近世の矢久村。矢久川右岸にあり、対岸には会田氏最期の砦とされる（『四賀村誌』）覆盆子城（やくろ）（矢久城・召田城）が望める。［地図 3］

所有者・所在場所　西澤功太家は現在無住であるが、庭に中世石塔の部材 6 個が庭石として置かれている。

伝承・歴史的景観　中世の部材は、もとは近くの仏堂か墓地にあったものと考えられたが、調査が進むうちに対岸にある阿弥陀堂跡（近世は無量寺末の龍洞庵、現在は矢久公民館）の召田一門の墓地から移されたものと推測されるに至った。召田氏は会田氏の有力家臣とされるが（『信府統記』『中川村誌』）、現在の西澤家との関係は不明である。



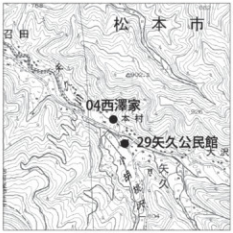
図版４　石造物実測図・拓本（４）



図版５　石造物実測図・拓本（５）

石造物の種類・数量　宝篋印塔の部材５個、五輪塔の部材１個。

解説・製作年代　６個の部材はいずれも安山岩製で、摩耗が激しい。宝篋印塔相輪 04-01 は九輪の下２条と請花部分で、何かに転用するため加工されたものと思われる。宝篋印塔屋蓋 04-02 は幅 23.5cm と小型で、軒上４段、軒下２段を刻むが、段高が低く全体に扁平な印象がある。15 世紀後半の製作であろう。同屋蓋 04-03 は幅 27.8cm と 04-02 よりは大きい。軒上は現状３段であるが上面に円孔を穿って最上段を削っている。軒下は２段、各段の段高は２cm と高く、軒端も 4cm と厚いので全体に大ぶりな感じがする。15 世紀前半の製作と考えられる。



地図３　矢久

同基礎 04-05 は幅 21.7cm と小型で上に２段の段形を刻むが段高は低い。側面は２区に分かつ関東型。15 世紀後半の量産期の所産であろう。同基礎 04-06 は幅 31.2cm と中型であるが、摩耗が著しい。側面上部を反花座とし、上面には奉籠孔を浅く穿ち、底面から重量軽減孔を大きく穿つ。両者は貫通していない。注目されるのは上面の奉籠孔の回りに９個の杯状痕が穿たれていることである。杯状痕とは近世の民間信仰によるもので、古い石塔には強い霊魂が宿ると考えられ、これを金属片（おそらく火打金具）を回して削り、石粉を熱冷ましなどのために飲むというものである。この杯状痕は佐久市入沢の六地蔵幢（重文）の竿にも付けられるなど所々でみられるが、いずれも近世の参詣者の多い寺社に所在する石造物に対して付けられるものである。五輪塔火輪 04-04 は緻密な多孔質安山岩製。幅 26.1cm に対し、高さが 13.1cm と低く、あるいは層塔の屋根とも考えられる。

05 両瀬上手　川久保家墓地　（図版６）

立地・環境　　近代の中川村、近世の両瀬村の上手村（なてむら）集落。虚空蔵山の南麓、両瀬川の開析谷の左岸に集落がある。［地図４］

所有者・所在場所　川久保福美家を本家とする川久保同姓は虚空蔵山の溶岩の露頭の上に墓地を設ける。

伝承・歴史的景観　その中に中世石塔の部材を組み合わせ、祖霊塔的な祀り方をされている１基がある。

石造物の種類・数量　小型多宝塔下層屋根１個、宝篋印塔の部材３個、五輪塔水輪１個。

地図４　両瀬

写真７

解説・製作年代　上から順に、宝篋印塔相輪 05-01、多宝塔下層屋根 05-02、宝篋印塔屋蓋 05-03、五輪塔水輪 05-04、宝篋印塔基礎 05-05 を重ねている（口絵 2-1）。いずれも一具とは認められないが、石材はすべて多孔質安山岩である。相輪 05-01 は九輪の５条を残し上下が欠失した小型宝篋印塔の残欠である。

その下の多宝塔下層屋根 05-02 は近年墓地内でみつかったものである。饅頭型から下の屋根を欠くが、上部の勾欄形、首部の円形ははっきり残っている。屋根底面も一部が残り、高さ 14.9cm を測る。沢屋金子家墓地の小型多宝塔下層屋根 02-21 より一回り小さい多宝塔と考えられ、製作は 15 世紀後半と考えられる。

宝篋印塔屋蓋 05-03 は軒上４段、軒下２段で、幅 34.1cm の中型塔である（写真７）。軒端の下辺は水平だか、上辺は大きく反り、軒端の形は長刀状（なぎなた）をなす。これにあわせて軒上の段形も３段目まで反らせる。各段の段高も高く、４段目は路盤を意識するようにひときわ高い。上面には奉籠孔を深く穿つ。隅飾は四隅とも完全には残らないが、大きな弧を描く二弧外反とみられる。下面

は縁を回し中を彫り窪め、塔身の請座としている。いずれの特徴も他に例をみない異色な屋蓋である。製作は 15 世紀前半と考えられる。五輪塔水輪 05-04 は石材の気泡が粗く、加工も不整形である。上面から長径 12.5cm、深さ 10.4cm の奉籠孔を穿っている。15 世紀後半の製作であろう。

その下の宝篋印塔基礎 05-05 は、側面の 1 面に四質地区で唯一の銘文が刻まれている（写真８）。銘文は「征右衛門（尉）／天文二天／青心□□／妙□□□／己（巳）四月廿日」と読め、天文２年（1533）の造立年が知られる。「征右衛門」はおそらく造立者の名乗り、「青心□□／妙□□□」は父母の戒名であろう。形態は側面上部を反花座とする通例の型であるが、反花が太い沈線だけで表現され平板である。幅は 29.6cm、底面から大きく重量軽減孔を穿っている。宝篋印塔の 16 世紀前半の様式を知ることのできる貴重な資料である。

写真８

06 原山川窪　内藤家　薬師如来坐像　（図版７）

立地・環境　近代の中川村、近世の原山。虚空蔵山の南東麓の会田川右岸にあり、会田川の谷を東にさかのぼれば地蔵峠を越えて青木村奈良尾に通じ、また北に向かえば風越峠を越えて筑北に至る交通の要衝である。［地図５］

所有者・所在場所　内藤喜章家はその古道の分岐点にあり、背後には会田川によって荒々しく削られた小川層砂岩の浸食崖がオーバーハング状に迫る。薬師如来坐像はその浸食崖の岩棚に祀られ、下からは石段が刻まれている（奥付写真中央）。

伝承・歴史的景観　内藤家には薬師如来坐像に関する伝承は伝えられていない。

地図５　原山・横川

石造物の種類・数量　石仏１躯（３個に割れている）。

解説・製作年代　薬師如来坐像 06-01 は頭部を失い、左膝の根元と胸の位置で大きく折損するなど損傷が激しい（口絵 2-2）。頭部には球状の河原石を載せ、ところどころをコンクリートで補修している。現状の像高（地付から肩）27.5cm、膝張 35.7cm。石材は黒色の多孔質安山岩である。偏袒右肩の衲衣（のうえ）をまとう。台座はなく光背も負わないが、結跏趺坐した膝幅は広く、ややうつむき加減にして腹前で法界定印を結ぶ上体には奥行きがあり、中世の造像であることをうかがわせる。法界定印の上に薬壺を載せているので尊格は薬師如来と分かる。ふつう薬師は右手施無畏印を表わし、左手与願印に薬壺を載せるのが通例であるが、こうした法界定印に薬壺を載せる像も儀軌（経典）に説かれていて、本像では丹波・丹後地方にみられる一尊七仏像がある（力禰都未 2012）。石造の如来像としては坂城町満泉寺の釈迦如来坐像（県宝・16 世紀前半）があり、衲衣の襞の表現が近似する。

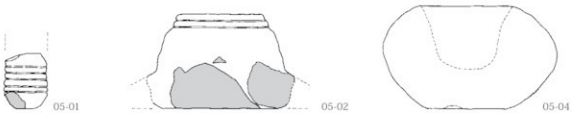
本像を祀る岩棚には剣形鉄製品が２点残されており、修験に関わる遺品とみられる。薬師は修験の本尊としてしばしば祀られるので、この薬師如来坐像も磨崖仏と同様な存在として修験者が関わり、下の古道を通る人々が仰ぎ拝み、信仰を集めていたと考えられる。市川惠一氏所蔵の近世文書には、本像を指すと思われる石仏を「古仏」と表記しているので（第４章）、信仰も中世からのものであろう。造像は 15 世紀と考えられ、丸彫りの石仏としては四賀地区唯一のものであり、貴重である。

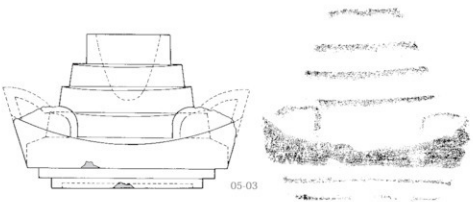
07 会田本町　廣田寺墓地　（図版６・７）

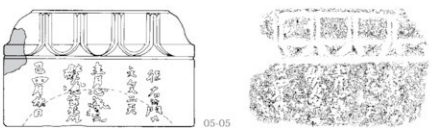
立地・環境　近代の会田村、近世の会田町村（会田宿）。殿村地籍の北、廣田寺は虚空蔵山の麓に位置する曹洞宗の寺。境内の西脇で岩井堂沢とうつつ沢が合流する。［地図６］

所有者・所在場所　宝篋印塔＝岩淵家。廣田寺境内墓地の岩淵家墓地に中世の宝篋印塔が近世初頭の伽藍

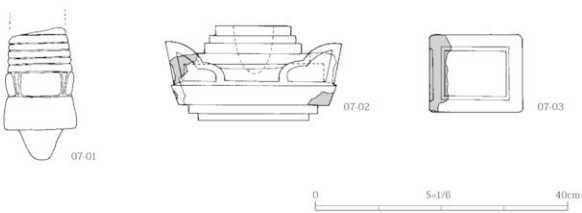
05 両瀬上手　川久保家墓地







07 会田本町　廣田寺墓地

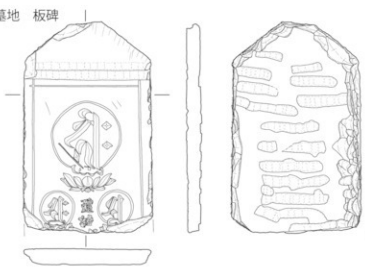


図版６　石造物実測図・拓本（６）

06 原山川窪
内藤家　薬師如来坐像

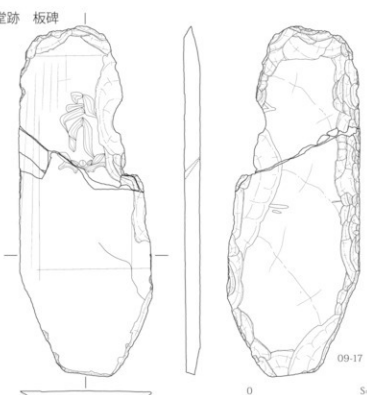
06-01

07 会田本町　廣田寺墓地　板碑



07-04

09 会田本町　にごみ堂跡　板碑



09-17

0　S=1/6　40cm

図版７　石造物実測図・拓本（７）

塔２基と一緒に置かれている（写真９）。板碑＝岩淵家。松本市立博物館寄託。

伝承・歴史的景観　「信府統記」によると、永正年間（1504 ～ 21）府中林村（松本市里山辺）の廣澤寺四世雪江玄固が開山、会田氏一族の岩下豊後が開基となり知見寺の名で創建され、天正年間（1573 ～ 92）に今の境内地に移り、寺号を廣田寺と改めたとされる。「知見寺」の字が現在の寺地の東裏山中にある。天正 10 年（1582）の小笠原氏による会田氏滅亡後、会田氏の菩提を弔うために中興されたものであろう。境内近くの岩井堂沢とうつつ沢の合流点の上には会田塚と呼ばれる自然石の石塔婆１基があり、摩耗により判読は困難であるが２名の大居士号の戒名が刻まれている。ここには滅亡した会田氏の具足や刀剣が遺骸の代わりに埋められたと伝わる（『四賀村誌』1978）。また後方山中に旗塚と称される塚状遺構（６基）のある尾根が境内墓地に向かって降りている（『福聚山廣田寺』1991）。

地図６　会田本町・宮本・西宮

石造物の種類・数量　宝篋印塔の部材３個、板碑１基。

解説・製作年代　廣田寺の境内墓地は近世墓によって占められるが、岩淵家の部材はおそらく他所から持ち込まれたものであろう。屋蓋 07-02 と塔身 07-03 は一具と判断されるが、相輪 07-01 はかなり大きく合わない。石材はいずれも多孔質安山岩。相輪は九輪の条線を沈線で粗く刻み、６条から上を欠失する。屋蓋は軒上５段を刻むが段高が低く、扁平感がある。隅飾の立ちも低い。塔身は幅 14.7cm と小型で、二重輪郭を回し中を彫り窪めるが、種子は刻まない。いずれも 15 世紀後半の量産品の特徴を示している。

第１図

また廣田寺墓地からはかつて中世の板碑が１点出土したといい、現在松本市立博物館に保管されている。07-04（図版７、口絵 1-2）は埼玉県秩父地方で産出する緑泥片岩製の武蔵型板碑である。現状高 33.5㎝、幅 20.5㎝を計る。頭頂部を欠くが山形を呈し明確な二条線が入る。種子は主尊が「キリーク（阿弥陀）」脇侍が「サク（勢至）」「サ（観音）」で月輪（がりん）の中に入る。月輪の下には蓮座が彫られ、蓮実と蓮弁に分かれる。脇侍の間に「道祐」と個人銘が入る。以下は欠損となる。

松本市では３点の板碑が確認されている。そのうちの２点が四賀地区で発見されたものである。もう１点は松本市新村の出土で、貞和３年（1347）の紀年銘がある。３点とも松本市立博物館に展示されている。

写真９

武蔵型板碑の場合は 13 世紀末頃から個人銘が刻まれるようになり、15 世紀には個人名が中央にくるという（武知 2015）。しかし脇侍の月輪の間に個人名が刻まれる例は今のところみられない。ただ月輪が刻まれていない場合はいくつかの類例がある。東京都北区田端 JR 東日本田端駅構内松平頼平邸跡出土の板碑（第１図）は月輪はないが脇侍の間に「妙位（カ）」の個人銘が刻まれ、下に並列で「逆修」、その下に「観應二年辛卯八月廿五日」と刻まれている。観応２年（1351）年の逆修塔である。高さ 103.4㎝、上部幅 27.1㎝を計る（東京国立博物館 2004）。ただこれは中央に個人銘がある特に古い例とみられ、その他は 15 ～ 16 世紀のものが主である（倉田恵津子 1995・2008、流山市教育委員会 2010）。これらは脇侍の間に個人銘が刻まれ、紀年銘は右脇侍下、日付は左脇侍下に刻まれる。07-04 がどちらの系統に属するか断定はできないが、やはり決め手となるのはその加工の緻密さであろう。種子の彫り込みが顕著にＶ字状の薬研彫りになっている点、蓮座等のつくりの丁寧さからみても 14 世紀（南北朝期）のものと推定される。

写真 10

写真 11

08 会田岩井堂　無量寺墓地　（図版８）

立地・環境　近代の会田村、近世の会田町村（会田宿）の岩井堂集落。近世の北国西往還（善光寺街道）が立峠に向かって抜けている。［地図６］

所有者・所在場所　無量寺。境内の西斜面に墓地があり、最上段の歴代住職墓の裏手に中世石塔の部材が近世石塔部材と一緒に組み合わされて置かれている。

伝承・歴史的景観　無量寺は天正２年（1574）仁科盛信（信玄の５男）の開基とされ、大町大澤寺の六世舜嶺正宥を開山に迎えて中興された曹洞宗の寺である。それ以前は真言宗の寺であったと考えられ、弘法堂・袈裟掛け松の伝承が残る。また、境内東の尾根には旗塚遺構（６基）がある。

石造物の種類・数量　宝篋印塔の部材４個、五輪塔空風輪１個、他に中世末の無縫塔２基。

解説・製作年代　無縫塔以外の中世石塔の石材はいずれも多孔質安山岩で、寺の中興以前のものと思われる。宝篋印塔相輪は 08-01 より同 08-03 の方が九輪の刻みは大きい。宝篋印塔屋蓋 08-02 は軒上５段、軒下１段、同 08-04 は軒上４段、軒下２段の違いはあるが、よく似る。五輪塔空風輪 08-05 は地方色の強い形をしている。ともに 15 世紀後半の製作であろう。

歴代住職墓の中の奥列中央の無縫塔２基 08-13・14 は、砂岩製ながら近世無縫塔と明らかに形態が異なり、中世に属する無縫塔と判断される（写真 10）。08-13 は高さ 89.1㎝、幅 43.2㎝を計る。塔身はずんぐりした形で丸みを帯び頭部も丸く仕上げられている。頭頂部に突起の作り出しはなく、最大幅部分の角が張るといったような近世の無縫塔とは異なる。砂岩製で銘文は読み取れない。蓮弁を線刻で刻んだ請座（08-14）に載っており、いわゆる単側無縫塔といえる。

寺伝では、戦乱により廃寺同然であった無量寺を仁科25世五郎武田信盛(盛信)が天正２年（1574）に父信玄追善のために再興して曹洞宗となし、安曇郡借馬村（現大町市）大澤寺６世舜嶺正宥を中興開山として招聘したという（無量寺縁起）。無量寺はかつて真言宗の寺院であったといわれるので、08-13・14 は中興開山の墓塔と考えられ、他の無縫塔に比較し大ぶりにつくられている。16 世紀後半のものと判断される。

08-15 は高さ 86㎝、幅 42㎝を計る(写真 11)。大きくずんぐりとし、08-13 とほぼ同形であるが請座はなく、方形の台座に直接載っている点で 08-13・14 より新しいものと推定される。銘文は「當山二世中興角翁林禅」と読める。08-13 に続く第２世の住職のものと考えられ、16 世紀後半～末の造立と判断される。

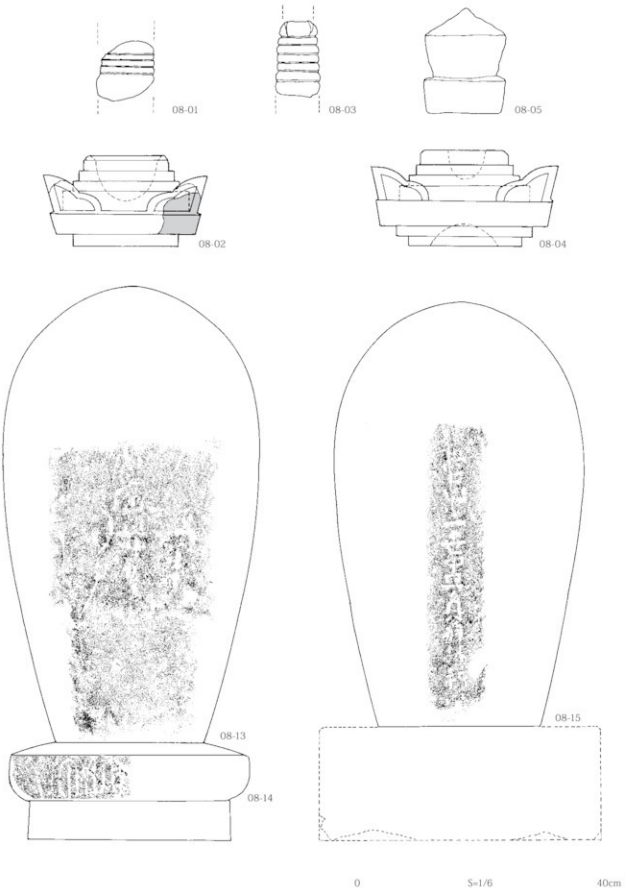
09 会田本町　にごみ堂跡　（図版７・９）

立地・環境　近代の会田村、近世の会田町村。にごみ堂跡は善光寺街道会田宿の西裏手の山付きに半島状に突き出した小高い小丘上にある（写真 12）。一帯は堀内一族数家の近世墓域になっている。［地図６］

所有者・所在場所　中世石塔＝堀内美代子家。墓域の最奥の堀内美代子家の墓を中心に中世石塔の部材がみられる。板碑＝堀内健家。松本市立博物館寄託。

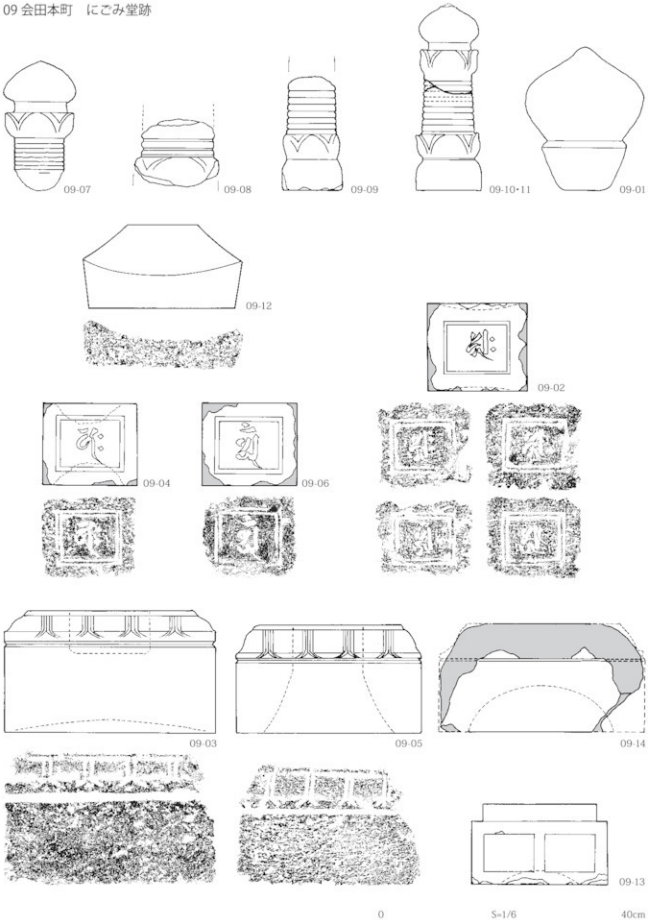
伝承・歴史的景観　にごみ堂跡の場所は、文禄３年（1594）の「会田郷往古の略図」（松本市教育委員会 2011）には堂を示す家形のマークに「人埋堂」と記されていた。安政２年（1855）に発掘したところ、古墳の横穴式石室のような石積みがみつかり、人骨が出土したといい、略図も残されている（第２図）。四賀地区周辺には現在のところ古墳の存在は確認されていないが、付近から須恵器片が採集されており、古墳（横穴式石室墳）の可能性は否定できない。古墳の石室を利用した中世の投げ込み堂のような、

写真 12



図版８　石造物実測図・拓本（８）

09 会田本町　にごみ堂跡



図版９　石造物実測図・拓本（９）

堂をともなう墳墓の可能性も考慮したい。また、もう一つ考えられるのは山梨県内などから報告されている地下式土坑、あるいは石組みを伴う土坑墓である。地下式土坑の性格をめぐっては諸説があるが、その中の一部は間違いなく埋葬施設である（狭川真一　2009）。にごみ堂跡の堀内健家墓地からは板碑も出土している。後方山中には旗塚遺構（９基）のある尾根がにごみ堂跡に向かって降りており（『福聚山廣田寺』1991）、近年まで尾根下の畑には焼骨片の散布がみられた。この一帯は中世の墓域であったと想定される。

石造物の種類・数量　宝篋印塔の部材 12 個、五輪塔の部材４個、板碑１基。

解説・製作年代　宝篋印塔相輪は５個あり、九輪の条線の刻みの深い 09-07・08、10・11 が 15 世紀前半、刻みの浅い 09-09 が 15 世紀後半の製作と考えられる。その中の 09-10 と 09-11 は接合でき全体形が確認できる（口絵 2-3）。復元高は約 30cm となり、篠首を高くつくった宝珠は形が良く、肉厚の上部請花は上端をむくり気味に反らせる。下部請花と伏鉢のバランスも良い。概して精緻なつくりで 15 世紀前半の作と判断される。今回の調査でこれと同工とみられる相輪が四賀地区周辺で他に少なくとも３個（20-01、22-01、34-01）確認された。これと同じタイプの相輪は上田市真田町（日向畑遺跡、耕雲寺石塔群）でも確認されており、宝篋印塔の流通を探る上で標識的な部材となりうる例である。

第２図

宝篋印塔の屋蓋は見当たらない。塔身 09-02、04、06 の３個は幅が 13cm 台とほぼ同寸で、15 世紀後半の量産品であろう。いずれも多孔質安山岩で、二重輪郭内を窪め、ア、アー、アン、アクという胎蔵界四仏の種子（しゅじ）を刻む。書体は細く、彫りも浅い。また上面と底面は工具跡を残して彫り窪める。

宝篋印塔基礎 09-03 と 09-05 は上部を反花座とする多孔質安山岩製で、09-03 は上面から方 13cm、深さ６cm の奉籠孔を穿つ。底面はわずかに窪める程度で軽減孔とまではいえない。09-05 は上面から穿った方 10cm の孔が、底面の方 21cm の軽減孔へと通じている。宝篋印塔内納骨の意識を残したつくりといえよう。同基礎 09-14 は近くの草むら内に放置されていた残欠であるが、ピンク色をした緻密な砂岩を用いている。図示はしていないが、草むらにあった同基礎 09-13 は安山岩製で、上は段形１段とする。側面は２区に分かつが、束が中央になく右に寄る。粗雑なつくりで中世石造物の終末期、16 世紀前半のものと思える。

五輪塔では、空風輪 09-01 は多孔質安山岩製で地方色を示す。火輪 09-12 は砂岩製ながら、軒の下辺はほぼ水平、上辺は真反りをなし、軒端はわずかに内傾し、棟の降りも端整に反る。伊派石工の五輪塔を模倣したものであろうか。いずれも 15 世紀前半の作とみられる。にごみ堂跡の中世石造物は 15 世紀前半から 16 世紀前半までのものがみられるが、五輪塔に対して宝篋印塔の比率が高いことが特徴的である。

またにごみ堂跡からはかつて中世の板碑が１点出土し、現在松本市立博物館に保管されている（09-17、図版 7）。緑泥片岩製で長さ 55.3㎝、幅 21.0㎝を計る。上部右辺が欠損するが上部 中央に種子（キリーク）があり、下に連座が刻まれている。その他には種子の下から伸びる条線などは認められない。種子も本来は阿弥陀三尊であるべきものが省略されているとみられる。整形も粗く種子の彫りも浅い。おそらく板碑の終末期（16 世紀）のものと推定される。

10 西宮　久保家墓地　（図版 10）

立地・環境　近代の五常村、近世の西宮村。会田町村から明科に向かう道の沿線にあり、いわれは会田神明宮（宮本村）の西に木花咲耶姫（このはなさくやひめ）を祀る西宮神社があることによる。［地図６］

所有者・所在場所　久保安俊家。宅地の西隣りに久保３家の墓地があり、中世の石造物はその最上段に重

ねるようにして置かれている（写真 13）。

伝承・歴史的景観　久保家は県道沿いにあり、先祖は甲斐国山梨郡久保の土豪で、長篠の戦い（天正３年＝ 1575）で当主が戦死したため、その妻子がこの地を宛われ移り住んだと伝える。武田氏滅亡後に帰農し、江戸時代は西宮村の名主を勤めた。墓地の下、道路より一段高いところに昭和戦後まで仏堂があった（堂名不明）。ここにある中世石造物は 20 個と、沢屋金子家墓地（真正寺跡）に次ぐ多さである。やはり仏堂の存在と関係するものと考えられる。久保家宅地内にある双体道祖神の天正９年（1581）の刻銘は後刻であろう。

石造物の種類・数量　小型多宝塔下層屋根１個、宝篋印塔の部材 12 個、五輪塔の部材５個、その他２個。

解説・製作年代　一番目を惹くのは、茶臼の下臼 10-04 の上に五輪水輪 10-03 を載せ、多宝塔下層屋根 10-02 が重ねられた姿である。多宝塔下層屋根は幅 27.2cm と小型で、沢屋金子家墓地（真正寺跡）の小型多宝塔下層屋根 02-21 よりもさらに一回り小さい。石材は重い安山岩。軒端は厚く両端で撥ねるように反る。軒下には１段の垂木型を表わす。饅頭型をつくり、上層塔身の勾欄の括りを刻む。しかし、全体のつくりは粗く、首部の平面形は真円になっておらず、屋根四隅の棟も不整形である。製作は 15 世紀後半に下るであろう。

茶臼の下臼は、下半分は自然石の摩耗面を残して石皿状をなし、上に下臼をつくり出し、摺り面に左回りの溝を刻んでいる（口絵 2-4）。中央に枘孔を貫通させる。石材は多孔質安山岩。本体石皿の径 28.9cm、摺り面径 17.5cm という小型石皿であることから粗製の茶臼と判断した。同様の茶臼（上・下臼）が昭和 20 年代に旧明科町の茶臼山城跡からみつかっており、『明科町史』に写真と図面が載っている（明科町史編纂会 1984）。もう１点石臼の上皿の残欠 10-12 がみつかっている。推定径は 27.6cm で普通の石臼と考えられる。

宝篋印塔相輪には 10-01、07・08、13 ～ 15 の６個があり、10-14 と 10-15 は接合する。石材はすべて多孔質安山岩である。10-01 は太く異形で、あるいは多宝塔などの相輪かもしれない。10-08 は九輪の条線を深く刻み、下部請花と伏鉢も大きく開く。いずれも 15 世紀前半の作であろう。10-07 は小型で宝珠・上部請花の形は良いが、九輪の条線の刻みは粗い。10-14、15 も九輪の条線の刻みは粗く、これらは 15 世紀後半の作であろう。宝篋印塔屋蓋は 10-10、16、18・19 の４個があり、10-18 と 10-19 は接合する。10-16 は、本来軒の上面と１段目の立ち上がりを水平と垂直の段形とすべきところを、屋根のような斜面とする（写真 14）。いわゆる北信濃型（日野一郎 1968）の特徴である。隅飾も軒端と面一（つらいち）につくり、立ちも高い異形である。10-10、18 と 10-19 は軒上４段、軒下２段の標準形ながら、各段のつくりが粗い。いずれも 15 世紀後半の作であろう。宝篋印塔塔身は 10-11 と 10-17 の２個がある。いずれも小型の多孔質安山岩製。10-11 は上面から径 7cm、深さ 2.7cm の浅い孔を大きく開けている。上に載る屋蓋としては 10-10 が寸法的に合致する。10-17 は側面２面を残した残欠で、アクの種子の陰刻が確認できる。これも側面から大きく孔が穿たれており、薬草の摺り鉢などに二次加工されたのではないかと思われる。宝篋印塔の基礎はみられない。

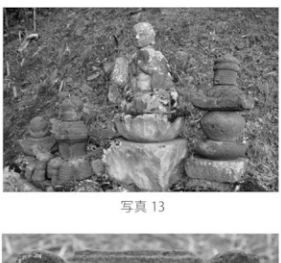


写真 13

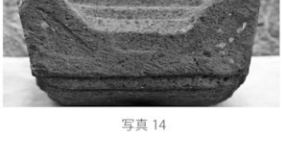
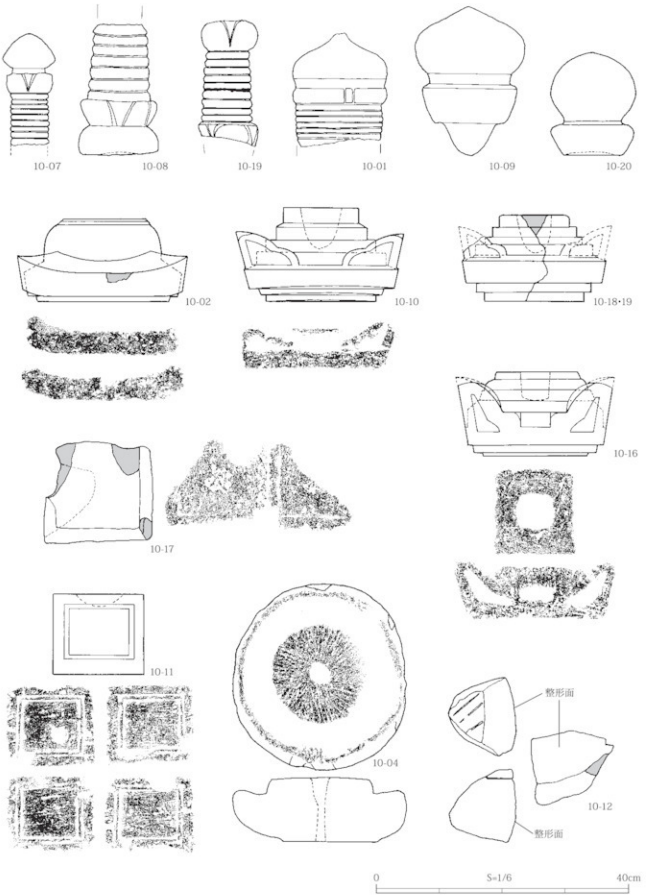


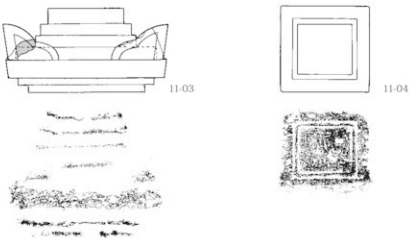
写真 14

五輪塔の空風輪に 10-09、20 の２個がある。石材は多孔質安山岩で、形は地方色が強い。五輪塔水輪 10-03 は赤色を呈する多孔質安山岩製で、算盤玉形をなし加工は粗い。中央の上下に孔が貫通する。いずれも 15 世紀後半の作と思われる。概して西宮久保家墓地の中世石造物は 15 世紀後半に集中するとみられる。

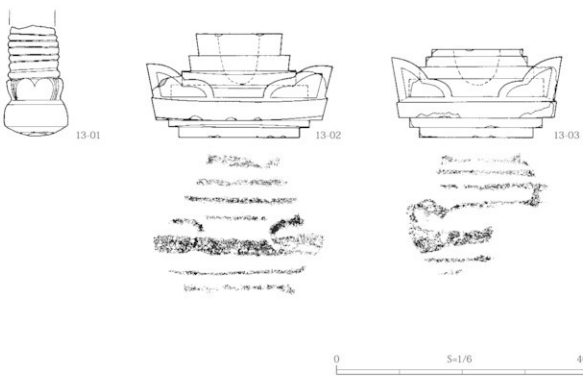


図版 10　石造物実測図・拓本（10）

11 西宮　和合堂墓地



13 井刈　降旗家



図版 11　石造物実測図・拓本（11）

11 西宮　和合堂墓地　（図版 11）

立地・環境　近代の五常村、近世の西宮村。会田川に架かる和合橋を渡った左岸に和合堂跡がある。ここに滝沢同姓 7 軒が墓地を構える。［地図 6］

所有者・所在場所　滝沢正行家。墓地の祖霊塔の奥のコンクリート基壇に、中世石塔の部材が 6 個組み合わされて 2 基として祀られている（写真 15）。

伝承・歴史的景観　和合堂は浄土宗の浄雲寺（会田取手）の門徒（末寺の寺格を持たない堂庵）で、かつては大きな堂が建ち、住僧がいた。11 月にはお十夜の祭りがあり団子を撒いたという。

写真 15

石造物の種類・数量　宝篋印塔の部材 4 個、五輪塔の部材 2 個。

解説・製作年代　宝篋印塔の相輪 11-02 は九輪の下 3 条から上を欠失する、下部請花の蓮弁を沈線だけで刻むなど加工は粗い。屋蓋 11-03 と塔身 11-04 は一具である。屋蓋の段高が低く、塔身の幅も 13.5cm と小型で、いずれも 15 世紀後半の量産期の作であろう。五輪塔空風輪は 11-01、11-05 の 2 個がある。ともに多孔質安山岩で、形もよく似る。高さは 20.2cm、23.2cm を測り、高さ 1 m 近い中型五輪塔の双塔であったか。製作は 15 世紀前半と考えられる。

12 西宮　伴在家墓地　（図版 12）

立地・環境　近代の五常村、近世の西宮村。山腹に何段かの平場をつくり、伴在家・滝澤家の墓地がある。［地図 7］

所有者・所在場所　伴在深志家。墓地に中世石塔部材が組み合わされ、近世の石塔と一緒に祀られている。

伝承・歴史的景観　一画には虚空蔵堂があり、近世の虚空蔵菩薩坐像が祀られている。蓮社号を持つ僧籍の墓もあり、近世には堂庵があったと思われる。

地図 7　中北山・落水

石造物の種類・数量　宝篋印塔の部材 9 個、五輪塔水輪 1 個。

解説・製作年代　宝篋印塔相輪は 12-01、05、09 の 3 個がある。いずれも多孔質安山岩製で、九輪は条線を刻み、その上下に請花をつくる通例のタイプである。12-05 は下部請花を肉厚に彫出し、製作は 15 世紀前半とみられる。同屋蓋は 12-02、06 の 2 個があり、いずれも多孔質安山岩製。12-02 は軒上 4 段のうち最上段を路盤として高くつくる。軒の上面がわずかに傾いており、ここを斜面につくる北信濃型の影響を受けているかと思われる。二弧外反の隅飾の残りがよい。15 世紀中頃までの作とみられる。12-06 は軒端が厚く、軒と 1 段目の上面を斜面とする北信濃型である。最上段を路盤として高くつくり、上面から径 7.2cm、深さ 8.5cm の奉籠孔を深く穿っている。隅飾の外反も大きい。各部のつくりも大ぶりで、15 世紀初頭の典型作と判断される。

宝篋印塔の塔身はみられない。同基礎には 12-03、07、10 の 3 個がある。いずれも側面を 2 区に分かつ関東型であるが、12-03、07 の 2 個は砂岩製で、加工が不正確で側面の束が中央にこない。上の段形も 1 段である。地元の石工によるコピー作であろう。12-10 は多孔質安山岩製で、上の段形は 2 段、側面は台形状に下方に開き軽快感を強調している。これも中世石塔の終末期、16 世紀前半の作と判断される。他に小川層砂岩製の五輪塔水輪 12-04 と、多孔質安山岩製の宝篋印塔基壇（または五輪塔地輪）12-08 がある。

13 井刈　降籏家　（図版 11）

立地・環境　近代の五常村、近世の井刈村。四賀地区の西端にある。［地図 8］

所有者・所在場所　降籏恒明家。中世石塔部材が組み合わされて庭石として置かれている（写真 16）。

伝承・歴史的景観　会田川を大ノ田橋で左岸に渡り南方の山を上る道は、執田光を通り、光や大口沢（安曇野市豊科）に抜ける重要な道であった。その麓に位置する降旗家には平家の落人伝説が伝わる。近くに真福寺があり、中世石塔との関係が考えられる。

石造物の種類・数量　宝篋印塔の部材３個。

解説・製作年代　先端が欠けた宝篋印塔相輪 13-01 の上に自然石の丸石を載せ、相輪の下に宝篋印塔屋蓋 13-02 を置き、その下には灯籠の火袋を挟み屋蓋 13-03 を置いている。相輪は九輪の７条から上を欠失するが、下部請花の蓮華は複葉のようにみえる。全体に大ぶりなつくりで、15 世紀前半の作と思われる。その下の屋蓋は相輪と一具とみられ、軒上４段、軒下２段を刻む。最上段は路盤として高くつくり、軒端上端と下２段は反らせる。二弧外反の隅飾は四隅とも先端が欠けていて高さは不明。上面に径 6.5cm、深さ 8.0cm の奉籠孔を深く穿つ。製作は 15 世紀前半とみられる。下の屋蓋は摩耗と欠失が激しいが、各段高が低く扁平観があり、製作は上の屋蓋よりも下る 15 世紀後半と考えられる。いずれも多孔質安山岩製である。

地図８　井刈・大足清水

写真 16

14 中北山　五輪平　（図版 13）

立地・環境　近代の五常村、近世の北山村。会田川右岸の山中にあり、東北山・中北山・西北山の３集落からなる。［地図７］

所有者・所在場所　木下辰男家。道沿いに組み合わせの中型宝篋印塔、他に部材が置かれている（口絵 2-6）。

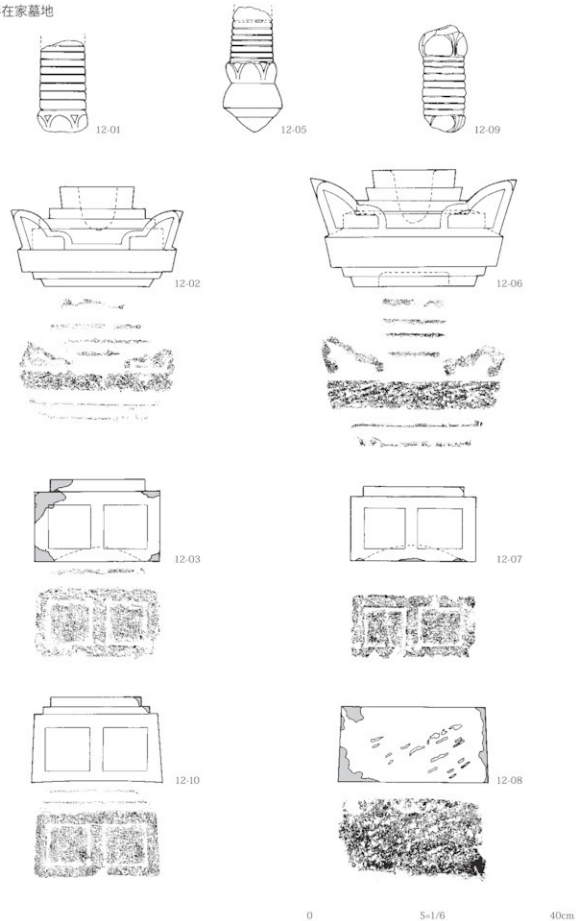
伝承・歴史的景観　東北山・中北山・西北山にあった集落は現在はいずれも無住となった。中北山の五輪平は会田・五常から潮沢方面に抜ける要所にあり、途中の峠には修験の行場である「のぞき」の地名が残っている。やや開けた平に木下家３戸で小集落を構成し、生業は会田川沿いの田畑へ出作に通っていた。地名の「五輪平」は石塔の林立する景観を表わしており、山間部ながら周辺に中世寺院の存在が想定される。木下家では、戦国時代の終わりに落ち武者としてここに移り住んだと伝えている。平の北隅に木下一族の墓があり、近世初期の伽藍塔を「本尊」と呼び、中に双体一石の僧形合掌像を祀っている。中世の石塔に対しては、毎年５月に石塔の前で「五輪様の祭り」を行ってきた。

石造物の種類・数量　宝篋印塔の部材 12 個、五輪塔空風輪１個。

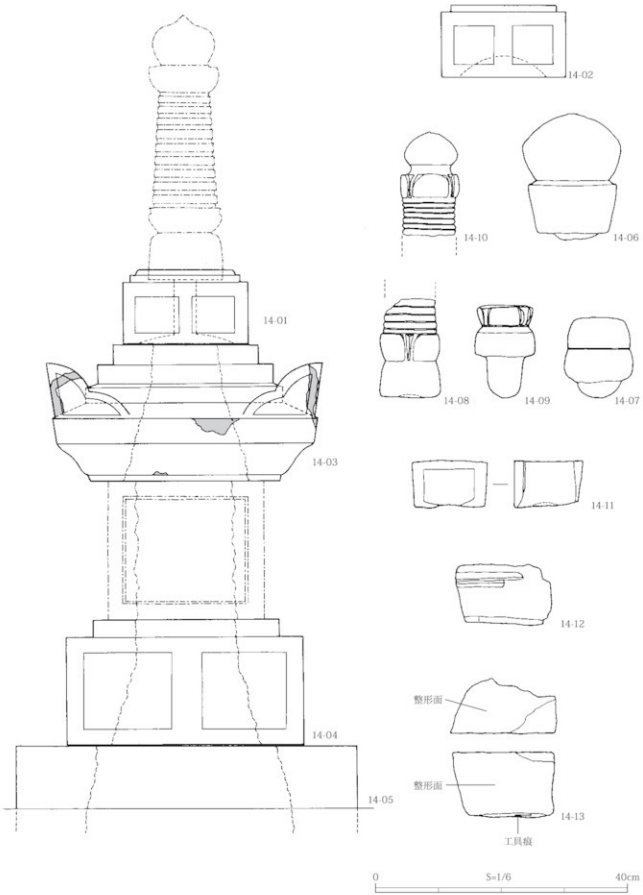
解説・製作年代　ここで一番目を惹くのは、宝篋印塔の屋蓋 14-03 である。幅は 42.1cm と中型の部類に属するが、四賀地区周辺では最大級の塔である。石材は白色を呈し緻密であり、安山岩と思われるが、溶結凝灰岩である可能性もある。軒端は水平で、軒の上面は斜面とする。その上に３段の段形を刻む。軒下は１段をてりむくりの繰形につくり、その下に薄い１段を刻む。二弧輪郭の大きな隅飾は外反はするが垂直に近い。この屋蓋で最も注目されるのは、上面から削り込んだ径 9.4cm の円孔が、底面から粗く穿った方 18cm の彫り込みと貫通していることである（写真 17）。そのためか大きく２つに割れている。屋蓋の下に来るべき塔身は失われ、代わりに縦長の近世の砂岩製塔身が置かれている。その下の基礎 14-04 も屋蓋と同様に中央に孔が貫通しており（写真 18）、さらにその下の基壇 14-05 はコの字形の部材を組み合わせ、中央に空間をつくっている。これは石塔の上から地下まで通じる奉籠孔であると判断される。そうした場合、小型宝篋印塔の基礎と思われた部材２個のうち、14-01 は上面に径 12.5cm の請座を深さ 2.1cm 削り込み、その中央に方約 4cm の孔を底面まで貫通させるので、この部材は屋蓋 14-03 の３段目の上に載る別石露盤であると考えられる（写真 19）。すなわちこの宝篋印塔は、別石露盤の上の相輪を外して現われた孔から、遺骨や遺品を投入すると地下の奉籠施設まで届く納骨塔と考えられるのである。

別石露盤 14-01 は側面を２区に分かち、上に段形２段を浅くつくるが、上の段は曲面とする丁寧なつく

12 西宮　伴在家墓地



図版 12　石造物実測図・拓本（12）



図版 13　石造物実測図・拓本（13）

写真 17

写真 18

写真 19

りで、下にくる屋蓋と雰囲気も寸法も合致する。石材は黒色の多孔質安山岩であるが、外面の風化の具合は屋蓋とも通じる。上面の請座と貫通孔は上記のとおりで、底面はやや窪めて重量軽減を図っている。基礎 14-04 は幅 38.0cm で、側面を２区に分かち、上に１段の段形を設ける。石材は屋蓋 14-03 と同じで、一具であることは明らかである。屋蓋と同様に貫通孔のためか大きく２つに割れている。基壇 14-05 はコの字形の２石からなり、幅は 54.5cm で、地上に 18cm を出して土中に埋まっている。製作年代と石材は不明である。地下に遺構があるかは、本調査の趣旨から手を着けなかった。以上の部材から復元される塔形は図版 13 に示すとおり、関東型宝篋印塔の典型である。こうした内部に貫通した奉籠孔を持つ中・大型の石塔は、14 世紀後半に「一結衆」の集団により建てられた集団納骨塔であることが知られる。詳しくは「付編」で述べる。

他の部材としては、宝篋印塔基礎 14-02 は重い砂岩製で、側面を２区に分かつが上の段形は１段である。同 14-01 などの多孔質安山岩製をコピーした地元の石工による 16 世紀前半の作と考えられ、同じ例は西宮伴在家墓地にも２例みられる（12-03、07）。

宝篋印塔の相輪には 14-07 ～ 10 がある。その中で 14-10 は本町にごみ堂跡の相輪（09-10・11）と同タイプである。14-12 は屋蓋、14-11 は塔身、14-13 は基礎と考えられるが、二次加工がされているようである。五輪塔の空風輪 14-06 は風輪を筒状につくる地方タイプで、底に低い枘を出す。上記はすべて多孔質安山岩で、14-10 以外は 15 世紀後半に属するものとみられる。

16 宮本　降幡家　（図版 14）

立地・環境　近代の会田村、近世の宮本村。会田町村の西に隣接し、名は会田御厨の神明宮に由来する。［地図６］

所有者・所在場所　降幡和男家。祝殿（荒神様）の石祠の前に置いて、神聖視してきた。

伝承・歴史的景観　降幡家はもと北山村に住居していたが、近世に現在地に移り、宮本村の庄屋を勤めた。会田川右岸の河岸段丘下にある自宅背後の五輪畑（もとは花村家の土地）から出土したと伝わる。

石造物の種類・数量　宝篋印塔屋蓋の残欠１個。

解説・製作年代　宝篋印塔屋蓋の約４分の１が残る残欠で、石材は多孔質安山岩である。軒上は３段目まで確認でき、軒下は２段が残る。軒上をやや斜面につくる。隅飾は二弧外反であるが、内側の弧は扁平。推定幅は約 22cm で、15 世紀後半製作の典型的なものである。

写真 20

17 落水　久保家　（図版 14）

立地・環境　近代の五常村、近世の落水村。西宮村の西に接し、会田川の右岸。［地図７］

所有者・所在場所　久保恵美子家。庭園の一隅に石灯籠として置かれている（写真 20）。

伝承・歴史的景観　近くに久保田家の墓地があり、一間堂の仏堂がある（堂名不明）。そこから持ち込まれたものと思われる。家人に仏塔としての認識はない。

石造物の種類・数量　宝篋印塔の部材３個。

解説・製作年代　宝篋印塔相輪 17-04 は摩耗が激しいが、九輪の 4 条から上を欠き、請花、伏鉢、底の枘が残る。同屋蓋 17-05 は軒上 5 段、軒下 2 段を刻み、上面から径 6.5cm、深さ 7.3cm の奉籠孔を穿つ。幅は 23.3cm と小型で、上の相輪とは合わない。塔身 17-06 は二次加工により側面の角が削られ、底面も加工されていて元の形状は不明。上から底に向かって孔が貫通している。寸法的には屋蓋と一具とみられる。ともに多孔質安山岩製で、15 世紀後半の製作であろう。

18 会田新町　長安寺　（図版 14）

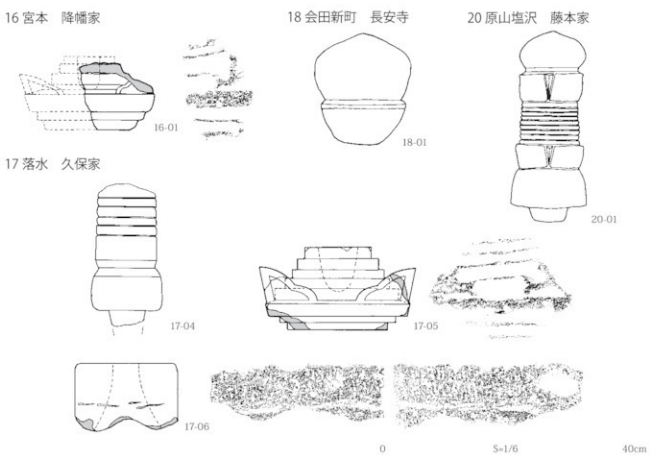
立地・環境　近代の会田村、近世の会田町村。殿村遺跡の東に接し長安寺がある［地図 6］

所有者・所在場所　長安寺。長安寺は臨済宗寺院で、近年無住となり本堂を解体して跡は更地になっている。境内の西に明治初期に廃寺になった補陀寺から移された石塔をまとめた一隅があり、近世の異形五輪塔の頭に載っている（奥付写真左上）。元は補陀寺から移されたものと推察される。

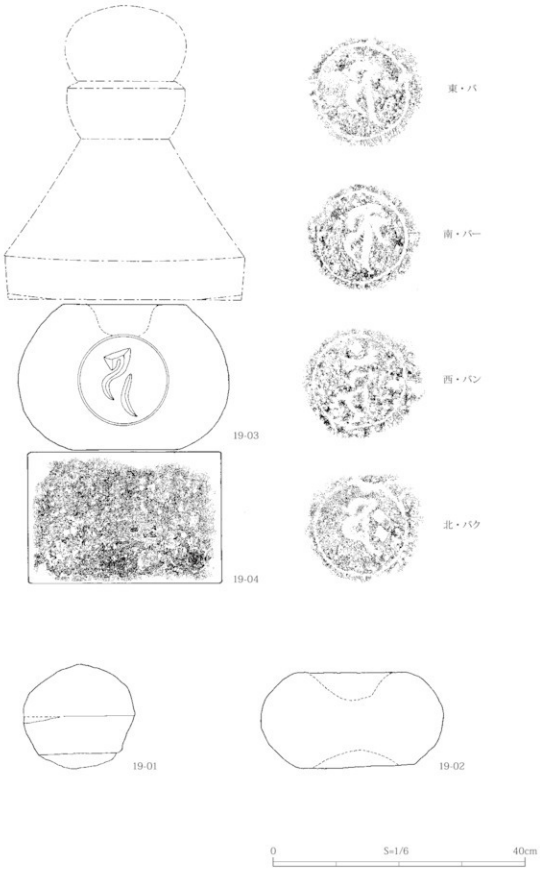
伝承・歴史的景観　真言宗であった補陀寺は旧会田小学校の体育館辺りにあったといわれる。その寺名から、起源は鎌倉時代の武士層に受け入れられた補陀落渡海信仰によるものではないかと考えられるが、詳細は不明である。岩井堂観音堂を奥院とする。

石造物の種類・数量　五輪塔空風輪 1 個。

解説・製作年代　五輪塔空風輪 18-01 は空輪下部のくびれと風輪のえらの出が少なく、四賀地区に多くみられる地方色を表わす。石材は白粒を含む多孔質安山岩で加工も粗い。15 世紀後半の量産期の製作とみられる。



図版 14　石造物実測図・拓本（1）



図版 15　石造物実測図・拓本（15）

19 両瀬　中原家墓地　（図版 15）

立地・環境　近代の中川村、近世の両瀬村。両瀬川右岸、上手集落手前にある。［地図 4］

所有者・所在場所　中原勝元家。両瀬川沿いの道路から 5 m ほど上がった高台に中原家の墓地があり、五輪塔の部材が 1 塔のように重ねられている（口絵 2-7）。

伝承・歴史的景観　墓地下方の平場は近年まで「念堂」と呼ばれる仏堂があり、礎石がいまも残る。

石造物の種類・数量　五輪塔の部材 4 個。

解説・製作年代　五輪塔水輪 19-03 は、幅 34.3cm、高さ 23.1cm、やや下膨れの堂々とした水輪で、小川層砂岩に工具痕を残して加工している。上面には径 11.0cm、深さ 5.3cm の奉籠孔を穿ち、底面は平らである。四方に月輪（がりん）を線刻し、中に種子を薬研彫りで刻す。種子は五輪塔四方門種子のうち水輪に当てられるバ（東・発心）、バー（南・修心）、バン（西・菩提）、バク（北・涅槃）の水輪四方門種子である。同地輪 19-04 は同じく小川層砂岩製で、幅 30.9cm に対して高さ 20.9cm と丈が高く古様を示す。側面の 1 面に銘文があるようであるが、摩耗が進み判読不能。おそらく水輪 19-03 と一具であろう。この場合、五輪塔四方門種子を空輪カ、風輪キャ、火輪ラ、水輪バ、地輪アとそれぞれに刻むのが本来であるが、このように水輪にだけ刻んで他は省略する場合もある。上田盆地にみられる鎌倉時代の五輪塔の流れを汲むもので、近隣では東筑摩郡麻績村の海善寺、筑北村坂井の安養寺の五輪塔と近似し、製作は 14 世紀前半と考えられる。

五輪塔水輪 19-02 は、幅 28.8cm に対し高さ 15.4cm とやや扁平ながら、最大径は丈の 6 分ほどにありバランスがよい。石材は緻密な多孔質安山岩製で、15 世紀前半の中型五輪塔であろう。五輪塔空輪 19-01 は幅 18.2cm、高さ 16.6cm を測る。現状空輪のみなので、空風輪別石とするものか、あるいは二次加工されて風輪が削られたものであろう。多孔質安山岩製のガス溜まりが多く、15 世紀後半の量産期の製作と考えられる。

写真 21

20 原山塩沢　藤本家　（図版 14）

立地・環境　近代の中川村、近世の原山村の塩沢集落。原山の中で塩沢集落だけは会田川の左岸に位置する。［地図 5］

所有者・所在場所　藤本きさよ家。現在は市川惠一氏が預かり管理している（写真 21）。

伝承・歴史的景観　藤本家近くの山ノ神社の御神体として祀られていた。ふだんは藤本家が管理し、祭りのときには堂へ持っていったが、30 年前に祭りが廃絶してしまった。

石造物の種類・数量　宝篋印塔相輪 1 個。

解説・製作年代　宝篋印塔相輪 20-01 は、宝珠の先端がわずかに欠けるだけの完形品である。会田本町にごみ堂跡の相輪（09-10・11）などと同じタイプの精緻なものであるが、両者を比較すると藤本家の方が丈が詰まり太めになり、篠首は低くなり、上下の請花も平板になって蓮弁も線刻で表現するように変わっている。同じ工房の作と考えられるが、最盛期のものからいくぶん時を経た 15 世紀後半の製作と判断される。

21 保福寺町　保福寺　（図版 16）

立地・環境　近代の錦部村、近世の保福寺町村。［地図 9］

所有者・所在場所　保福寺。単制無縫塔は本堂裏の山手に厨子に納め「おんぼ様」として祀っている。もう 1 基の無縫塔は本堂左手前の歴代住職墓の基壇右端に祀っている。

伝承・歴史的景観　寺伝によると、文永 5 年（1268）鎌倉建長寺の大覚禅師（蘭渓道隆）の開山といわれている。歴代住職の墓誌では 7 世の住職が応永 14 年（1407）に寂した後、住職が途絶え 15 世紀の間は無住の状態になり、文亀 2 年（1502）に雪天正等により曹洞宗に改宗され現在に続いている。雪天正等は山辺廣澤寺の僧侶で保福寺の中興開山となった。

おんば様は金太郎の母親という伝説があり、山姥として信仰されてきた（柳田邦男 1969、松崎憲三 2017）。保福寺川支流の商人沢と北から流れる久手地の沢の合流点には、おんば様（大姥様）が米を研いだ白い石が残っているという（姥が懐）。覆屋内には鉄板製の小型鳥居が数枚残っており付近の住民が安産祈願をした痕跡があるが、最近はお参りをする人も皆無であるという。

石造物の種類・数量　単制無縫塔１基（部材３個）、無縫塔塔身１個。

地図９　保福寺町

解説・製作年代　21-01 は無縫塔塔身で背が低く丸みを帯びる「卵型」である（口絵 1-3）。頭頂部が広がった部分が最大幅となり、その下は曲線を描いてすぼまる形となる。高さ 29.2㎝、幅 28.6㎝を計る。底部に枘がつくり出されている。石材は多孔質安山岩である。21-02 は無縫塔塔身の請座で上部に穿たれた枘孔が 21-01 の枘を受け止めている。大振りな単弁の請花が肉厚に彫られている。高さ 15.0㎝、幅 38.3㎝を計る。石材は砂岩である。21-03 は台座で六角形を呈する。底部にはわずかに重量軽減孔が穿たれる。高さ 11.7㎝、幅 35.1㎝を計る。石材は多孔質安山岩である。以上３部材で一具の無縫塔である。『四賀村の石造文化財』でも紹介されているが、墓塔であるという認識はない。しかし明らかに中世の単制無縫塔である。

写真 22

鎌倉の建長寺には蘭渓道隆の無縫塔がある（写真 22、神奈川県教育委員会 1971）。21-01 のほうが丸みを帯びるが、両者を比較してもその形状に違和感はない。蘭渓道隆が寂したのは弘安元年（1278）であるが、造立は没後間もないとする説（石田茂作 2016）、鎌倉最末ないし南北朝初期とする説がある（神奈川県教育委員会 1971）。請花 21-02 は 13 世紀末とも捉えられる京都東福寺荘厳院無縫塔（南山和尚無縫塔）のつくりに似ており、時代の古さをうかがわせる（川勝政太郎 1978）。単制無縫塔の最古の例としては京都大徳寺の宗峰妙超（1282 ～ 1338）の開山塔があげられる（写真 23、川勝 1978）。高さは 73㎝で八角形の台座の側面に格狭間を作り、上端に複弁の反花を刻む。無銘であるが 14 世紀前半の可能性が高い。21-01 ～ 03 は塔身の形状・請座の蓮弁の肉厚さ、台座の形状からみても時代は下ることなく、遅くとも 14 世紀前半に帰属すると考えられる。

写真 23

21-04 は無縫塔の塔身である（写真 24）。旧四賀村で昭和 59 年に実施した調査の際は請座が存在したが、今は塔身のみが残る。基壇にコンクリートで固められ底面は観察することができない。高さ 30.5㎝、幅 29.6㎝を計る。表面の剥離が進んでいるが、21-01 より大きく重量感がある。石材は多孔質安山岩であり、他の歴代の住職墓が砂岩製であることと比べると明らかにタイプが異なる。中世の製作であることは確かだが、請座・基礎がなく塔身のみなので具体的な時期判定は難しい。

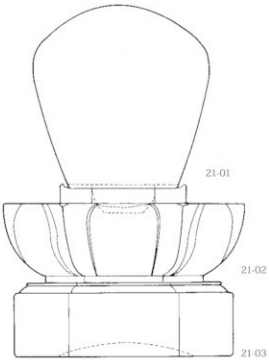
写真 24

22 保福寺町　山本家　（図版 16）

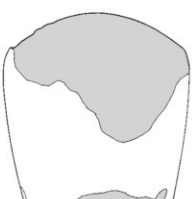
立地・環境　近代の錦部村、近世の保福寺町村。［地図９］

所有者・所在場所　山本茂家。古代の東山道（近世の保福寺道）の保福寺宿が街村をなす通りからやや引き込んだ１軒で、元は山口家。屋敷の北東を欠いて、外に向けて小型の石祠を据え、その中に近世の宝篋印塔の相輪とともに祀っている（写真 25）。鬼門除けの信仰と考えられる。

21 保福寺町　保福寺



22 保福寺町　山本家



23 七嵐中村　武川家

図版 16　石造物実測図・拓本（16）

伝承・歴史的景観　現在の戸主山本氏はこの地の伝承は知らない。近所の両角民雄氏によると、石塔は裏山から出土したものを持ち込んだものではないかとのこと。この辺り（保福寺町周辺）では、出産時の腥衣を埋める後産墓（埋め墓）と保福寺境内に石塔のある墓（参り墓）との２か所にお盆の墓参りをする（両墓制）。各戸は山際にそうした後産墓を持っていて、畑の耕作中に古い石塔が出土することがあると聞く。また、保福寺の前には後産を埋める「後産畑」があり、産婆さんがその場所を知っている。

写真 25

石造物の種類・数量　宝篋印塔相輪１個。

解説・製作年代　宝篋印塔相輪 22-01 は２つに割れているが、宝珠から伏鉢まで揃っている。復元高は 28.5cm。石材は多孔質安山岩であるが、摩耗が激しい。形状は会田本町にごみ堂の相輪（09-10・11）と共通するタイプであるが、高さに対して径が太く全体にずんぐりしていて、原山藤本家（20-01）に近いものである。製作は 15 世紀後半に属するものであろう。もう一つ石祠の中に納められている相輪は近世初期のものである。高さは 31.4cm、小川層砂岩製で摩耗は少ない。宝珠は先が尖り、上部請花は７弁、下部請花は６弁に間弁を入れる異形なものである。

23 七嵐中村　武川家　（図版 16）

立地・環境　近代の錦部村、近世の七嵐村。保福寺川の左岸、白張沢沿いに集落が開け、中心に神宮皇后を祀る白張神社がある。［地図１］

写真 26

所有者・所在場所　武川靖家。現在武川姓５軒、他１軒の祝殿に祀る金山様の祠の前に置かれている（写真 26）。

伝承・歴史的景観　金山奉行であった武川但馬守ただつね（現在の飯沼精米所が屋敷であった）が天正 13 年（1585）に帰農する際、於下、中屋、大家、大上の４軒に分かれ、祝殿を祀ってきた。祭りは５月２日。石塔（の部材）は裏山の旧長命寺（廃仏毀釈で廃寺）の墓地から移したものであろうという。かつては子供が転がして遊んでいた。旧長命寺の墓地は子供のまま（成人せずに）死んだ人の墓があり、後産も埋めるので後産墓地とも呼ぶ。石塔は洞光寺にあり、お盆には両方に墓参りをする。

石造物の種類・数量　五輪塔の部材２個。

解説・製作年代　五輪塔空風輪 23-01 は全高 22.7cm と大ぶりである。底辺に高さ 3.6cm の枘をつくる。23-02 は同空風輪の枘が根本から折損したものだが、高さ 15.5cm を測り大型の五輪塔が想定される。ともに多孔質安山岩製で、15 世紀前半ものであろう。

24 両瀬大門　久保田家墓地　（図版 17）
25 両瀬大門　稲垣堂　（図版 17）

立地・環境　近代の中川村、近世の両瀬村の大門集落。会田川の右岸、両瀬村の入口に当たる。大門の地名がどの寺社に関わるものかは不明。［地図４］

所有者・所在場所　久保田佳弘家、自宅裏手の墓地にある（写真 27）。稲垣勉家、稲垣家持ちの稲垣堂に置いている（写真 28）。

伝承・歴史的景観　久保田家・稲垣家ともに両瀬村入口の大門集落にある。久保田家は単独で自宅裏手に墓地を構える。近年墓地を改修したが近世墓塔と一緒に中世石塔も祀っている。稲垣家は自宅西の沢を隔てた山付きに共同墓域があり、その上段に稲垣家持ちの稲垣堂がある。阿弥陀如来を祀り、住持も住んでいた。春秋の彼岸には大門の組中で例祭を行っていた（『四賀の寺社文化財誌』1997）。

写真 27

石造物の種類・数量　久保田家、宝篋印塔の部材２個。稲垣家、宝篋印塔の部

写真 28

材 1 個。

解説・製作年代　久保田家の宝篋印塔相輪 24-01 は、九輪の 3 条から上と底部の柄を折損しているが、九輪と請花の刻みは深い。同屋蓋 24-02 は、軒上 4 段の各段を高く刻み、最上段は露盤としてひときわ高く、軒上面をやや斜面とする。幅 22.9cm と小型ながら北信濃型に分類される。隅飾は故意に欠かれているように見受けられる。上面に柄孔を大きく穿つ。相輪 24-01 と一具であろう。ともに多孔質安山岩製で 15 世紀前半の作と判断される。

稲垣家の宝篋印塔基礎 25-01（写真 28）は、幅 31.6cm と中型の部類に属し、側面に沈線を刻み上 4 分の 1 を反花座とする通例のタイプである。上面に穿った径約 13cm の円孔が、底面の方約 23cm の粗い加工の孔まで貫通している。大きさから久保田家の屋蓋とは一具ではない。多孔質安山岩製で 15 世紀前半の作であろう。

26 横川日向　野村家墓地　（図版 17）
27 横川日影　草間家墓地　（図版 17）
30 横川日向　横内家墓地　（図版 17）

写真 29

立地・環境　近代の中川村、近世の横川村。会田川の上流部、左右両岸にわたる小村。東に行くと会吉新田村を過ぎ、地蔵峠を経て上田藩領に至る。［地図 5］

所有者・所在場所　右岸日向の野村宗芳家は自宅裏の墓地（写真 29）。左岸番場の草間伊知郎家は自宅庭（口絵 2-5）。右岸日向の横内忠一（故人）家は自宅近くの一族墓（写真 30）。

伝承・歴史的景観　上田藩領に近いので、松本藩により横川口止め番所が置かれた。その番人を勤めたのが横内家であり（『信府統記』）、屋号も「番所」である。横内家は現在無住になっているが、屋敷の造りは小規模ながら武家屋敷の構えを示す。横内家は自宅の西を流れる沢を越えた山中に一族墓を構え、その墓群の中央に近世初期の大型伽藍塔を据える。その前に中世五輪塔の空風輪だけが 1 個置かれている。

野村家は横内家の上段に屋敷があり、江戸時代には当主自らが堂主となって自宅裏手に仏堂を開き、寺子屋の師匠もしていた。その堂裏に墓地があり、近世墓塔と一緒に宝篋印塔の屋蓋が置かれている。野村家には「織田信長家臣野村甲斐」と刻銘のある位牌が先祖のものとして伝わっている。

番場の草間家は、近くのソウレイ（葬礼）畑にあった宝篋印塔の屋蓋を自宅の庭に移し飾っていた。

石造物の種類・数量　野村家、宝篋印塔屋蓋 1 個。草間家、同屋蓋 1 個。横内家、五輪塔空風輪 1 個。

解説・製作年代　野村家の宝篋印塔屋蓋 26-01 は、幅 22.2cm と小型であるが、軒上面を斜面とする北信濃型である。四隅の隅飾を人為的に欠いているようにみえる。多孔質安山岩製で、15 世紀後半の作とみられる。

草間家の宝篋印塔屋蓋 27-01 は、幅 26.4cm で中央から縦に 2 つに割れている。軒上 5 段の各段の立ちも高く、下から 1 段目の平場を斜面とする。信州新町から小川・中条方面にみられる典型的な北信濃型であるが、斜面に板葺きを表わすような刻みを施すのは異色である。多孔質安山岩製で、15 世紀前半の作とみられる。

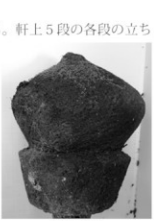
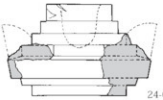


写真 30

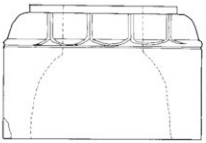
横内家の五輪塔空風輪 30-01 は、最大径 20.3cm、現状の高さ 26.7cm と大型である。空輪頂部に突起をつくり、底面に柄を出す。空輪は横に張り、風輪の側面形も直線をなし、地方色を表わしている。多孔質安山岩製で、15 世紀前半の製作であろう。

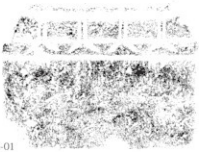
24 両瀬大門　久保田家墓地

24-01

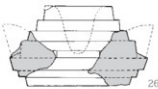

24-02

25 両瀬大門　稲垣堂

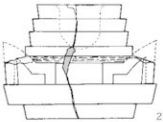



25-01

26 横川日向　野村家墓地


26-01

27 横川日影　草間家墓地

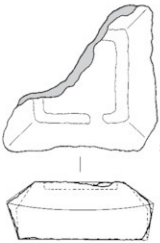

27-01

28 会吉　上條家

28-01

29 矢久　矢久公民館（阿弥陀堂跡）

29-01


29-02

30 横川日向　横内家墓地

30-01

0　S=1/6　40cm

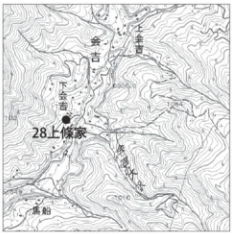
図版 17　石造物実測図・拓本（17）

28 会吉　上條家　（図版 17）

立地・環境　近代の中川村、近世の会吉新田村。会田川の最上流部、左右両岸にわたる小村。会田川を詰めると、地蔵峠を経て上田藩領に至る。［地図 10］

所有者・所在場所　上條治徳家。自宅前の庭に庭石として飾ってある（奥付写真右下）。

伝承・歴史的景観　会吉新田村は寛永 14 年（1637）に開発の始まった近世の新田村であり、中世の石塔が元からこの場所にあったとは考えられない。現在上條家は庭に置いているが、自宅奥に伽藍塔 3 基が祀られており、本来この中に納められていたと思われる。すなわち上條家が新田開発に関わりこの地に移り住んだとき、出身地から先祖の遺品として持ち込んだことが考えられる。上條家の出身地は不明。



地図 10　会吉

石造物の種類・数量　宝篋印塔相輪 1 個。

解説・製作年代　宝篋印塔相輪 28-01 は、九輪の 5 条から上を欠失する。摩耗が激しいが請花は間弁のある単葉 4 弁と確認できる。多孔質安山岩製で、最大径 10.4cm と小型であるので 15 世紀後半の製作と思われる。

29 矢久　矢久公民館（阿弥陀堂跡）（図版 17）

立地・環境　近代の中川村、近世の矢久村。矢久川対岸に 04 矢久西澤家がある。［地図 3］

所有者・所在場所　矢久公民館（阿弥陀堂跡）。前庭の召田一門墓所に近世の部材とともに置かれている。

伝承・歴史的景観　現在矢久公民館となっている阿弥陀堂跡は、近世には無量寺末の龍洞庵があり、無量寺の隠居寺となっていたという。公民館の前庭には県天然記念物のカヤ（推定樹齢 430 年）があり、その根元周辺を一段高くして低い石垣で囲い、召田一門の墓所としている（写真 31）。墓所内は近世墓塔で占められるが、隅に中世石塔の部材 2 個が確認できた（奥付写真左下）。04 矢久西澤家の部材もここから移されたのではないかと考えられる。

石造物の種類・数量　宝篋印塔相輪 1 個、層塔屋根 1 個。

解説・製作年代　宝篋印塔相輪 29-01 は、宝珠、篠首、九輪の 2 条が残り、その下を欠失する。摩耗は激しいが、精緻な加工が認められ、会田本町にごみ堂の相輪（09-10・11）と同タイプのものである。多孔質安山岩製で、15 世紀前半の製作と考えられる。層塔屋根 29-02 は、幅 23.0cm の方形屋根が斜め半分に割れた残欠である。上面に方 10.7cm の塔身の請座のような窪みをつくる。側面の軒は下辺が水平で、上辺は真反りをなし、軒口は内傾する。底面は平らである。これまで知られている層塔は屋根上に上層の塔身をつくり出した部材を重ねており、本件が層塔屋根だとすれば別材の塔身を据えたことになる。この部材 1 個だけでは層塔であることを証明できないが、石材は多孔質安山岩で軽く、中世の石造物であることは間違いない。製作は小型であることから 15 世紀後半と考えておきたい。

写真 31

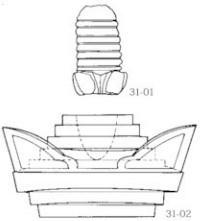
31 明科大足清水　光久寺　（図版 18）

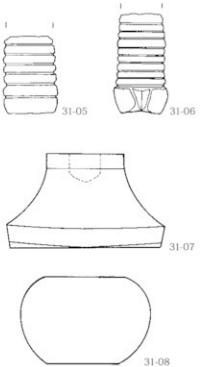
立地・環境　近代の東筑摩郡中川手村（現安曇野市明科）、近世の大足村。会田川下流の左岸、長峰丘陵の裏手の山間部である。［地図 8］

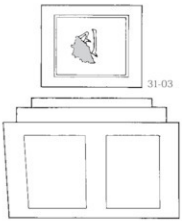
所有者・所在場所　光久寺。薬師堂の手前に組み合わされて 3 基が祀られている（写真 32）。

伝承・歴史的景観　光久寺の建つ大足清水は塔ノ原城の裏手（搦め手）にあたり、光久寺は塔ノ原氏の隠

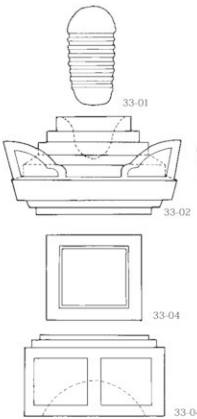
31 明科大足清水　光久寺

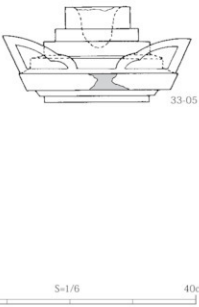






33 明科光　宗林寺





図版 18　石造物実測図・拓本（18）

写真 32

居寺と伝わる。本尊薬師如来の脇侍日光・月光菩薩立像（県宝）は仏師・善光寺妙海の作で、文保元年（1317）の像内墨書銘がある。

石造物の種類・数量　宝篋印塔 1 基分（部材 4 個）と相輪 2 個、五輪塔の部材 4 個。

解説・製作年代　宝篋印塔 1 基はこれまで一具の完形塔とみられていたが（口絵 2-8）、もとは庫裏裏手の土中から掘り出されたもので、池から流れる溝に投げ込まれたように廃棄されていたものを、郷土史家の幅具義氏と旧明科町教委の大澤慶哲氏が掘り出して組み合わせたことが、大澤氏からの聞き取りで分かった。

宝篋印塔相輪には 31-01、31-05、31-06 の 3 個があるが、いずれも完形ではなく、最も残りのよい 31-01 を屋蓋に載せている。屋蓋 31-02 は幅 26.8cm と小型で、軒上 5 段、軒下 2 段を刻むが、各段高が低く全体に扁平な感がする。それに対して二弧外反の隅飾は大きく肥大した観がある。また軒端の下辺と下 1 段目は下に向けて湾曲させている。塔身 31-03 は幅 16.3cm で、上の屋蓋と一具とみてよいだろう。二重輪郭を回し中に胎蔵界四仏の種子を刻むが、種子の彫りは浅く細い。その下の基礎 31-04 は側面を 2 区に分かち、上に 2 段を設ける関東型であり、幅は 28.8cm と屋蓋・塔身の寸法に近いが、加工が粗く側面の直角が出ていない。上の屋蓋・塔身とは一具とは考えられず、別の宝篋印塔の部材であろう。底には重量軽減孔をつくらない。石材はいずれも多孔質安山岩で、製作は 15 世紀後半の量産期のものと判断される。

五輪塔火輪 31-09 は幅 33.3cm、同水輪 31-10 は幅 31.7cm と大ぶりで堂々としている。2 個は収まりが悪く一具とは思えないが、ともに 15 世紀前半の作と考えられる。五輪塔火輪 31-07 は幅 23.2cm、同水輪 31-08 は幅 20.6cm と小型である。火輪は上辺を露盤状につくるが、加工精度は良い。水輪はやや不整形であり、2 個は一具とは思えないが、ともに 15 世紀後半の作であろう。石材はみな多孔質安山岩である。

32 明科塔ノ原　法音寺（参考掲載）（図版 19）

34 明科塔ノ原　上手屋敷遺跡　（図版 19）

立地・環境　近代の東筑摩郡中川手村（現安曇野市明科）、近世の塔ノ原村。犀川の右岸、長峰山の西の河岸段丘上に開けた場所にある。西方に北アルプスを望む眺望のよい場所である［地図 11］

所有者・所在場所　法音寺、歴代住職墓地。上手屋敷遺跡、安曇野市教育委員会（明科支所保管）。

伝承・歴史的景観　塔ノ原の殿村地籍（現明科中学校周辺）には塔ノ原氏の居館があったとされ、遺構が残り、遺物が発見されていた（上手屋敷遺跡）。その居館跡の上に菩提寺の雲龍寺が建つ（写真 33）。また南の丘陵の中腹には法音寺があり、住職墓地の中に大型の宝篋印塔が残る。法音寺は四賀五常の法音寺地籍から移転したと伝わるが、その時期は不明。法音寺地籍には現在仏堂が建つが、法音寺集落は江戸時代初めに西宮村の飛び地として開墾された所である。上手屋敷遺跡は、昭和 30 年代の客土用土の採取で遺構は破壊され、さらに明科中学が建設されて、遺構は消滅した。その過程で拾われた中世石塔の部材がある。

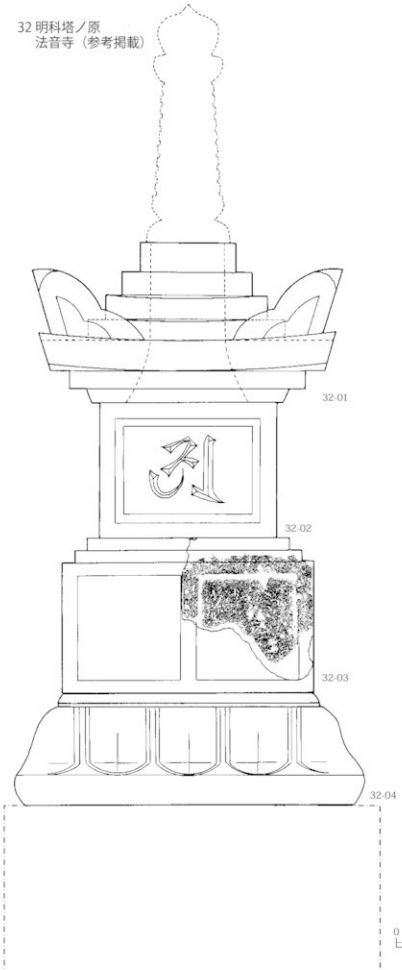
地図 11　明科

石造物の種類・数量　法音寺＝宝篋印塔 1 基ほか。上手屋敷遺跡＝宝篋印塔相輪 3 個、五輪塔水輪 1 個。

解説・製作年代　法音寺宝篋印塔　法音寺の調査は今回実現しなかった。しかし浜野が平成 21 年に許可を得て調査し、その結果を『信濃』（62 巻 1 号 2010）に発表した報告があるので、それを元に解説し、図は一部加筆して掲載する。

法音寺の大型の宝篋印塔は図上復元が可能である。屋蓋 32-01 は幅 45.5cm を測り大型の部類に属し、四賀地区周辺では最大の塔である。段形は軒上 4 段、軒下 2 段を大ぶりに刻み、最上段は露盤を意識してや

32 明科塔ノ原
法音寺（参考掲載）



34 明科塔ノ原　上手屋敷遺跡

写真 33

0　S=1/6　40cm

図版 19　石造物実測図・拓本（19）

や高めにつくる。軒端は大きく上反りし、その上２段もやや反る。下辺以外に輪郭を回す大きな隅飾は図のように外反する。石材は白っぽい安山岩とみえるが、溶結凝灰岩である可能性もある。その下の塔身 32-02 は二重に輪郭を回し、中に雄渾な種子を薬研彫りで刻んでいる。種子は胎蔵界四仏のア、アー、アン、アクである。石材は黒っぽい多孔質安山岩である。その下の白い立方体の部材は寸法が合わず、別の五輪塔の地輪であるかもしれない。石材は溶結凝灰岩のようにみえる。塔身の下にくるべき基礎 32-03 は、破片となって周辺に転がっていたが、側面を２区に分かち上に段形２段を刻む関東型の基礎が復元できる。拓本を採ると輪郭の中に「沙弥□□」「沙弥□□」という銘が読み取れた。基礎の下の反花座はほぼ完全に残っており、太い刻線で単葉の蓮華を刻んでいる。石材は白っぽい安山岩とみられ、塔身のつくりに比べるとやや稚拙な細工のようにみえる。そして何よりも驚かされるのは、屋蓋上面の円孔から下が、塔身、基礎、反花座まで中空につくられていることである。さらに塔身の一側面には縦長長方形の小窓が開けられていた痕跡が認められる。つまり、この宝篋印塔は「沙弥□□」「沙弥□□」という結名（けちみょう）からも明らかなとおり、一結衆によって造立された集団納骨塔であったと考えられる。塔身の小窓は分骨や遺品を投入する奉籠孔であろう。この塔は五輪平の中型宝篋印塔（14-01 ～ 05）と共通するもので、造立は 14 世紀後半と考えられる。詳しくは「付編」で述べることにする。

写真 34

上手屋敷遺跡出土品　宝篋印塔相輪 34-01（写真 34）は、宝珠の一部を欠き、九輪の上から４条を残して下を欠失するが、工作は精緻で上部請花は複葉８弁を表わす丁寧なつくりである。同相輪 34-02 の下部請花は間弁を大きくつくる４弁、同相輪 34-03 の下部請花は小さな間弁の入る４弁である。いずれも九輪の条線を深く刻む。３個とも多孔質安山岩製で、15 世紀前半の作と判断される。五輪塔水輪 34-04 は自然石を転用したものか、不整形で側面に加工の跡がみえない。多孔質安山岩製である。

33 明科光　宗林寺　（図 18）

立地・環境　近代の東筑摩郡中川手村、その後明科町光（現安曇野市明科）、近世の筑摩郡光村。犀川下流の右岸、東に田沢山山地を背負う。［地図 11］

所有者・所在場所　宗林寺。本堂に向かって左手前に置かれている。

伝承・歴史的景観　宗林寺は昭和 36 年の落雷で本堂が焼失し、寺歴は不明という。本堂前の宝篋印塔２基は、松本城主石川数正の没後、子の石川三九郎（康長）が両親の菩提を弔うため造立したと伝わり、旧明科町は石川数正の供養塔として町文化財に指定したが、宝篋印塔は中世のものである。本堂焼失以前は裏の中庭にあったという。光氏に関わる供養塔と考えられ、宗林寺の場所が光氏の居館であった可能性もある。

石造物の種類・数量　宝篋印塔の部材５個（２基分）。

解説・製作年代　２基ある宝篋印塔のうち左塔（東塔）は、相輪 33-01、屋蓋 33-02、塔身 33-03、基礎 33-04 からなる（写真 35）。総高 52.5cm を測る小型の塔である。相輪は九輪を７条に刻み、上下の請花はなく、宝珠も半球状に表わす簡略なもので、下部の一部を欠失する。屋蓋は幅 29.1cm で、軒上４暖、軒下２段に刻む。二弧外反の隅飾は大きく、残りがよい。塔身は幅 12.8cm と小さく、二重輪郭を回すが種子は刻まない。基礎は側面を２区に分かち、上に２段を設ける関東型である。底から重量軽減孔を大きく穿つ。石材はいずれも多孔質安山岩で、製作は 15 世紀後半。この時代の特徴を如実に示し、一具とみられる塔は貴重である。

写真 35

右塔（西塔）は屋蓋 23-05 のみが当初材で、あとは後補である。屋蓋は幅 27.5cm で、軒上４段、軒下２段を刻むが、各段高が低く扁平な感がある。その反面、隅飾は左塔よりも大きく、より外反し、時代が下ることを示している。石材は多孔質安山岩である。

第４章　調査のまとめ

１　石造物の種類と部材の残存傾向

今回の調査で確認された中世石造物の部材の総数は 183 個となった。そのうち石臼などその他３個を除いた 180 個が仏教信仰に基づく信仰遺物、いわゆる石塔である。まずはこの中世石塔について分析したい。

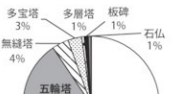
はじめに石塔として完形品か部分品かという点では、完形品は６基（部材で 12 個）しか確認されなかった。部材の比率で７％である。内訳は保福寺の無縫塔（21-01･02･03）、明科光の宗林寺宝篋印塔の左（東）塔（33-01～04）、廣田寺とにごみ堂から出土したという板碑２基（07-04、09-17）、会田岩井堂の無量寺の無縫塔２基（08-13･14、08-15）である。廣田寺墓地とにごみ堂跡の板碑２基は、１部材で１基であり欠損はあっても完形品として扱う。いずれも寺院内で守られた石塔であることは注目される。それ以外の 168 個はすべて部材である。数個で一具の組み合わせを確認できても、石塔としてはどこかの部材を欠いていたり、あるいはまったく１個のみの単体であったりする。つまり、当初の石塔の姿を保つものが極めて少ない。

次に確認された石塔の種類であるが、石塔の中でも古典的な宝塔と、石灯籠や六地蔵幡などの石幡を除き、中世に一般的な五輪塔、宝篋印塔、多宝塔、無縫塔、板碑、石仏が揃い（層塔は不確定）、バリエーションに富んでいる。その中心はやはり五輪塔と宝篋印塔になるが、今回の調査で、中型多宝塔が１基分（部材３個）と小型多宝塔が３基分（部材３個）確認されたことは特筆される。石造の多宝塔は「その遺例は甚だ少ない」（石田茂作 1974）とされ、全国的にも貴重である。

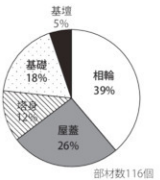
中世石塔の種別割合はグラフ１に示すとおりである。これはあくまでも部材数を分類したものである。五輪塔は空風輪・火輪・水輪・地輪の４部材に、宝篋印塔は相輪・屋蓋・塔身・基礎・基壇の５部材に分かれるのに対し、板碑は１基１部材である。そうしたアンバランスはあるが、前述したとおり四賀地区周辺には完形石塔が少ないことを考えると次善の方法であり、種類別の石塔（基数）の分類とは大差ないと考える。

そうした中で、宝篋印塔が全体の 64％、五輪塔が 26％という比率は注目される。長野県内の中世石塔の集積地では、確認される宝篋印塔の残存数は五輪塔の 10 分の１以下であるといわれ、長野市・善光寺花岡平の事例が報告されている（小山丈夫 2000）。その理由は、宝篋印塔は五輪塔に対して加工の工程が多く高価なため、庶民層は五輪塔を、武士や富裕層は宝篋印塔を造塔したのではないかとされる。これに従えば、四賀地区周辺の宝篋印塔 64％という数字は特異で、造塔信仰の支持層にまで関わる重要な問題となる。

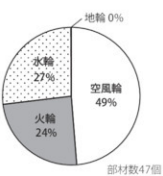
部材ごとの残存傾向であるが、宝篋印塔部材 116 個の種別割合をグラフ２、五輪塔部材 47 個の種別割合をグラフ３に示した。宝篋印塔は相輪が 39％、五輪塔では空風輪が 49％を占め群を抜いている。その理由は、宝篋印塔の基礎や基壇、五輪塔の地輪は建築材などに転用されやすいのに対し、宝篋印塔の相輪や五輪塔の空風輪は転用の利用価値が低い反面、象徴的な部材だけに、信仰に関わる二次的な利用が考えられる。



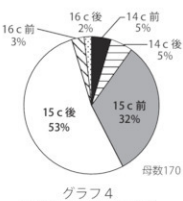
グラフ１
中世石塔の種別割合



グラフ２
宝篋印塔部材の種別割合



グラフ３
五輪塔部材の種別割合



グラフ４
中世石塔の年代別割合

写真 36

写真 37

写真 38

2　石造物の製作年代と様式および石材

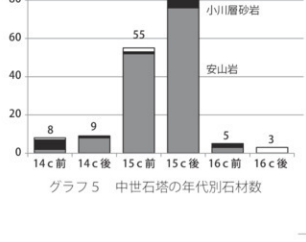
それぞれの石塔の製作年代については、例言で記したとおりの基準に基づき、14 世紀前半から 16 世紀後半までを半世紀ごとに分けた。その年代ごとの部材数を示したのがグラフ 4 である（年代の特定しきれない 10 個の部材を除く）。四賀地区周辺の造塔は 14 世紀に始まり、15 世紀前半に展開期、15 世紀後半に量産期を迎え、16 世紀前半には終末期を迎えたと考えられる。16 世紀後半に属するのは、前述の無量寺の無縫塔 2 基である。

まず、14 世紀前半と考えられるのは、沢屋金子家墓地の中型多宝塔（02-03 ～ 05）、両瀬中原家墓地の五輪塔（19-03・04）、保福寺の無縫塔（21-01 ～ 03）の 3 基分である。いずれも古様を示し、全国的見地に立っても逸品といえる。

その次の 14 世紀後半と考えられるのは、中北山五輪平の宝篋印塔（14-01、03 ～ 05）と明科塔ノ原法音寺の宝篋印塔（32-01 ～ 04）の 2 基分と、沢屋金子家墓地の小型多宝塔（02-21）の 1 部材である。2 基の宝篋印塔は中型、大型で、中に空洞を設けるのが特徴である。紀年銘は確認できないが、法音寺塔の基礎には「沙弥□□」「沙弥□□」との結名が拓本により確認でき、この時代に流行した一結衆による集団造塔と判断される。こうした集団造塔は上田市真田町実相院の貞治 6 年（1367）銘宝篋印塔ほか県内に数例あり、一結衆による造塔が四賀地区周辺まで及んでいたことを示す。

15 世紀前半は展開期と考えられ、中型から小型の石塔が多数みられるようになる。長野県内で確認できる宝篋印塔は、基礎の側面を 2 区に分かつ、いわゆる関東型が多いが、四賀地区周辺では基礎の側面上部を沈線で画し反花座とする例が多く、類例は上田小県方面にもみられる。また相輪は、宝珠の下の篠首に高くつくり、上下の請花の蓮弁を肉厚にして、全体に流麗でバランスの良い相輪が、四賀地区周辺では目についた（09-10・11、20-01、22-01、34-01）。これとまったく同工房と思われる例を、上田市真田町の日向畑遺跡（真田町教育委員会 1973 年・写真 36）や耕雲寺（写真 37）で確認している。四賀地区は地蔵峠を越えて上田小県方面に近く、石造物の流通も考えられる地域である。

その一方、いわゆる北信濃型（日野一郎 1968）の宝篋印塔も散見された（10-16、12-06、24-02、26-01、27-01）。これは屋蓋の軒上面を斜面にして屋根のようにつくり、段形の各段高を高くして大きな高まりとし、相輪の宝珠下に水煙をかたどった鰭（ひれ）を四方付けるものである。この北信濃型は長野市信州新町を中心として特徴的にみられ（写真 39）、大町方面にも分布する（写真 38）。その相輪はみられなかったものの、北信濃型の宝篋印塔の屋蓋が流入していたことが判明した。



グラフ 5　中世石塔の年代別石材数

次に石材についてみてみたい。石材は原産地ばかりでなく、石塔の製作地および石工の問題とも関係しており、四賀地区周辺においては製作年代と関わってくることを、グラフ 5 に示した。すなわち、14 世紀前半の沢屋金子家墓地の多宝塔と両瀬中原家墓地の五輪塔は、地元の筑北地方に特徴的な小川層砂岩という軟質石材を使用している。14 世紀後半の中北山五輪平と明科塔ノ原法音寺の宝篋印塔 2 基は白色の安山岩（溶結凝灰岩の可能性もある）を使用している。それに対して 15 世紀前半にほぼとんど黒色の多孔質安山岩に変わる。この多孔質安山岩は四賀地区周辺では原産地

が確認できないが、東信の浅間山麓には転石として到るところでみられる。15 世紀後半になると硬質砂岩が交じるようになるが、それらは地方色の強い五輪塔が多く、宝篋印塔の砂岩使用例は少ない。16 世紀前半には、両瀬川久保家の天文２年（1533）銘の宝篋印塔基礎（05-05）がある。石材は多孔質安山岩であるが気泡の入り方が粗い。16 世紀後半は、無量寺墓地の無縫塔２基であるが、地元に一般的な硬質砂岩を使用している。

写真 39

3　石造物の地域分布および所在場所

今回調査を行った地点は、松本市四賀地区（旧四賀村）で 29 地点、安曇野市明科地区（旧明科町）で４地点の合計 33 地点である。第２章の「調査の方法」で述べたとおり、四賀地区は『四賀村の石造文化財』の調査をもとにした悉皆調査である。また、明科地区は事前の情報に基づくポイント調査である。その調査地点の分布を巻頭図に示し、地域別の石造物別部材数の内訳を第２表に示した。

第２表　地区別石塔数

地区		地点数	宝篋印塔部材	五輪塔部材	多宝塔部材	無縫塔部材	板碑	多層塔部材	石仏	計
四賀	錦部	4	6	2	0	4	0	0	0	12
	中川	12	16	7	1	0	0	1	1	26
	会田	7	35	24	4	3	2	0	0	68
	五常	6	41	9	1	0	0	0	0	51
周辺	明科	4	18	5	0	0	0	0	0	23
計		33	116	47	6	7	2	1	1	180

この分布図から四賀地区周辺における中世石造物の分布傾向がある程度読み取れると思う。地区としては四賀地区のうちの錦部・中川・会田・五常の４地域にくまなく分布している。しかし、その内容を詳細にみると、地点数で最も多いのは中川の 12 地点であるが、部材数は 26 個と全体の３位である。１地点の確認数が１～２個と少ないためである。それに対して会田は７地点と全体の２位であるが、部材数は 69 個と１位である。五常も６地点と３位であるが、部材数は 52 個と２位を占めている。会田と五常では、１地点当たりの確認数が平均 9.3 個と多いためである。錦部は４地点で 12 個と、地点数・部材数とも４位である。会田の殿村遺跡の発掘範囲からは中世石造物の発見は今のところないが、地上に伝世する部材数からいえば、会田から五常かけて集中することは指摘できる。

さらに中世石塔の現在置かれている場所（第３表）についてみてみたい。場所を次のとおりの５種類に分類し、33 地点の振り分けをみると第２表のとおりである。自らの先祖であるかは別として、宝篋印塔・五輪塔などの石塔を古い墓塔・供養塔と認識している場合もあり、また何であるかは分からないものの、霊力の備わる物として山の神・屋敷神・鬼門除けなどの御神体として祀る例もある。さらには庭園の庭石として観賞の対象としている例もあり、置き方はさまざまである。

第３表　中世石塔の置き場所

①	寺院の境内または墓地	7
②	仏堂が伴うなどの同族墓地	10
③	自宅近くの家墓	5
④	自宅敷地内の屋敷神、山の神など	6
⑤	自宅庭園の庭石として	5
	合計	33

4　文献上に現われる石造物と社寺との関係

（1）板場真正寺

02 板場沢屋金子家墓地の石塔群は「五輪様」として祀られており、中世の石塔以外は存在しない。地元の人々にはそこに「真正寺」という寺があったことが根強く伝わっており、実際墓地のすぐ西側には「真正寺」という字が残っている。この寺の存在をうかがわせる唯一の史料が、板場の小口正治氏所有の「扣（控）書之事」という文書である。「一　鍛次（冶）屋在家清涼庵取り立てに付き、板場村真正寺貞厳和尚逐電以

来大破に及び清涼庵硯厳和尚・庄屋源太郎同腹にて、真正寺を引き付け法縁に仕りたき」旨を浄雲寺（取手村）と庄屋源太郎が板場村の庄屋と組頭に宛てたものである。「文禄二年申十一月十四日」と記されているが、文禄２年（1593）は申ではなく巳である点、「庄屋・組頭」といった言葉がみられる点など疑問が残る。しかしこの文書には真正寺が無住となり「大破」している様子が書かれており、金子家墓地が真正寺に関するものであれば中世のある段階で廃絶したものと考えられる。

（2）近世に残る中世石造物の信仰

市川惠一氏所蔵の「元禄十一年会田組原山村御絵図下吟味帳」には原山村の堂についての記載がある。その中に「川久保」の「薬師空殿」が載っている。「本尊薬師如来座像石仏長一尺四寸古仏」と記されており、これが 06-01 の薬師如来坐像を示す。元禄 11 年（1698）の段階で「古仏」とされている。

また、「生沢」の「山神宮」がみられる。「生沢」は「塩沢」の訛りであり、番号 20 塩沢を示す。この山の神に 20-01 の宝篋印塔相輪が祀られていた。後に藤本家で相輪は預かることになったが、祭りの度に山の神へ運んで行ったという。宝篋印塔の一部が神体として扱われていた好例であり、同じく祠に祀られていた保福寺町山本家の相輪 22-01 と通じるところがある。

（3）保福蘭若

義堂周信の漢詩文集「空華集」（南北朝時代）には「應安戊申（1368）冬十一月廿日、前長樂大本禪師中公、信陽珂里之保福蘭若（ほふくらんにゃく）に示寂す」とある。「大本禪師中公」は大本良中 という臨済宗の高僧で、上野国長楽寺の住職を勤めた人物である。「信陽」は一般的に信濃を示すが、『信濃史料』は「珂里」を筑摩郡 としている。「蘭若」とは寺院のことを示すので、この解釈のとおりなら「保福蘭若」は保福寺ということになり、臨済宗の高僧の大本良中は晩年筑摩郡の保福寺に住したことになる。筑摩郡には中山（松本市）の保福寺と四賀地区保福寺町の保福寺の２か寺がある。双方とも中世から続く寺であるが、中山の保福寺が臨済宗妙心寺派に改宗されるのは天文元年（1532）のことであり、それまでは高野山派の真言宗であった（小松芳郎ほか 1986）。すなわち『信濃史料』の保福寺は四賀の保福寺を示していることになる。

前述のとおり四賀の保福寺の寺伝では、15 世紀初頭までは臨済宗であったとされ、大本良中が保福寺に身を置いていたとすれば、南北朝時代に保福寺は臨済宗の寺院であったことが明確となり、前述の無縫塔（21-01 ～ 03）のもつ意味が重要になる。すなわち開山（名誉的な）あるいは２世（実質的な開山）を祀っていた可能性が出てくる。しかし「珂里」は中国語で「対他人故里的美称」の意味で、第三者の故郷に対する美称であるので、大本良中が信濃国出身であることは証明されるが、「珂里」が筑摩郡であるとは限らない。延宝６年（1678）に完成した禅僧の伝記「延宝傳燈録」では大本良中について「信州善応に遷住す。応安元年中冬二十日寂す」とある。成立年不詳の「和漢禅刹次第」に「高梨　善應寺　保福山」と記されている（続群書類従完成会）。これを『信濃史料』は「善應寺」を高井郡と解釈するが、「恐らく保福寺の誤り」としている。日本禅宗史研究家の玉村竹二は「善應寺の所在は詳らかでない」とし、大本良中は保福寺で寂したと述べている（玉村 2003）。 とすれば、四賀の保福寺は臨済宗の高僧が住する格の高い寺院であったといえよう。

引用・参考文献

神奈川県教育委員会　1971　『神奈川県文化財図鑑　建造物篇』（神奈川県教育委員会）
小松芳郎　1986　「保福寺（松本市中山）」『信州の仏教寺院』第３巻（郷土出版）
倉田恵津子　1995　「武蔵型板碑の生産と流通システム」『松戸市立博物館紀要　第２号』（松戸市立博物館）
玉村竹二　2003　『五山禅僧伝記集成〈新装版〉』（思文閣出版）
東京国立博物館　2004　『東京国立博物館所蔵板碑集成』（雄山閣）
倉田恵津子　2008　「関東地方主要河川流路と武蔵方板碑の流通２」『松戸市立博物館紀要　第 15 号』（松戸市立博物館）
浅山市教育委員会　2010　「浅山市立博物館調査研究報告書 26　中世の浅山を探る」（浅山市教育委員会）
武知眞澄　2015　「武蔵型板碑の展開と終焉」（文芸社）
続群書類従完成会　『続群書類従』第 28 輯上釋家部

付編　松本市四賀地区における中世石造物の造立とその変遷

浜野　安則

1　造塔の目的と造立者

第４章「調査のまとめ」で明らかになった結果について、調査に携わった者の一人として、詳細な考察は稿を改めることにして、簡略に見解を述べる。

写真１

まず、最大の関心事としての誰が何のためにこれらの石塔を造立したかであるが、結論からいえば調査の対象になった石塔（部材）に造立者（施主）を示す銘文などがなく、はっきり証明することはできなかった。しかし、歴史的な状況の中で考えることができる。それは、鎌倉時代に東信から四賀地区に移ってきたとされる海野氏の一族、いわゆる会田氏一族の武士たちと推察される。東信の武士で滋野氏一族を称する海野・祢津・望月氏らは、おそらく御家人として出仕した鎌倉で新しい仏教文化に触れたのであろう、在地で熱心な造塔活動を始めた。それは両親や一族の菩提を弔うため、五輪塔や宝篋印塔などの石塔を造立することが、自らの功徳を積むことにもなるという、造塔信仰に基づく行為である。

そうした中で現在知られる最も古い例は、承久２年（1220）銘をもつ津金寺（北佐久郡立科町）の宝塔（長野県宝）である。この塔には造立者として滋野氏の名が刻まれ、地元の望月氏による造塔と考えられている（写真１）。源平合戦後の論功行賞で県内各地の旧平氏領の地頭として補任された滋野氏一族は、転住先でも造塔を行った。佐久市香坂を本貫とする香坂（高坂）氏は更級郡牧野島（長野市信州新町）に移ったが、この地でも盛んに造塔を行い、香坂氏の菩提寺と伝わる安養寺（信州新町）から発掘された石塔群の中には嘉慶２年（1388）銘の宝篋印塔がある。また、香坂氏の一派は伊那郡にも展開し、駒ヶ根市周辺に諏訪神氏流の中沢氏とともに造塔を行ったと考えられる。東伊那大久保（駒ヶ根市）の蓮台場石塔群には応永 12 年（1405）をはじめとした応永年間の銘のある石塔が４基ある。このような分派先の滋野氏一族の造塔には、多孔質安山岩を用いるという共通点がみられる。この石材は東信の浅間山麓で容易に入手でき、ここに石工が定着したと思われる。造立者の同族関係だけでなく、石工と石材についても交流があったことがうかがえる。今回の調査で四賀地区周辺からは中世石塔の部材が 180 個確認され、中世石塔の少ない中信地区においては特異な集積地帯であることが証明された。その造立者に東信の海野氏を始祖とする会田氏一族を比定することは間違いないと考える。

ただし、今回の調査で会田氏一族の惣領家による石塔造立を確かめることはできなかった。なぜならば、地上で確認される石塔の分布は、確かに会田から五常にかけての範囲に集中するものの、惣領家の居館があったと伝えられる殿村遺跡周辺からはみつかっておらず、これまでの発掘でも出土していないからである。その反面、赤怒田・矢久・五輪平・井刈など四賀地区の縁辺部からも石塔はみつかっている。これらは会田郷全体の守りのために配置された一族の武士の居住地ではないかと考えられる。そうした武士たちが惣領家の信仰にならい造塔を行ったと思えるのである。殿村遺跡は会田氏惣領家の居館に寺院が隣接した複合施設ではないかと考えているが、今後の発掘により殿村遺跡の主体部から石塔が発見される可能性は考えられる。

石塔の種類の分類では、宝篋印塔が全体の 64％、五輪塔が 26％という比率が注目されるが、これまで宝篋印塔の残存数は五輪塔の 10 分の１以下といわれる中世石塔の集積地を見ていくと、長野市・善光寺花岡平、東御市・善福寺跡（写真２）、立科町・津金寺など、たしかに数百といわれる五輪塔に対して、宝篋印塔の割合は数％にすぎない。しかし、考えてみるとこれらの寺院は 15 世紀を中心に周辺の庶民がこぞって五輪塔を施入した地域の惣寺的な存在であり、無数の五輪塔が林立する景観こそが特異なのではないかと思える。石材からみて四賀地区周辺の多孔質安山岩製の石塔は、おそらく製

写真２

品としてほとんどが上田・小県方面から搬入されたものと判断される（信州新町方面からの北信濃型の流入もあるが）。そうした場合、運搬にかかる費用は、安価な五輪塔には付価しづらく、もっぱら高価な宝篋印塔の搬入になったのではないかと想像される。そのために庶民層による五輪塔の造立は普及せず、会田郷内（四賀地区）に惣寺的な寺院も、それに伴うなう大規模な墓域も成立しなかったというのが、現在のところの推論である。

また石塔以外の石造物３個についてであるが、内訳は板場小口家御塚堂の石臼片、西宮久保家墓地の茶臼下臼および石臼上臼片で、石材はいずれも多孔質安山岩である。こうした石臼などの生活具が中世石塔と一緒にみつかる例はこれまでも多く報告されている（長野県埋蔵文化財センター「対面所遺跡」1998 年ほか）。多孔質安山岩という石材は共通するが、信仰に関わる石塔と、生活具である石臼とがなぜ同じ墓域に投棄されているのかは民俗学的な理由が考えられる。「日常生活のなかで臼が果たす役割は、きわめて大きく、昔の人たちは臼を一家の中心的道具として尊重し、神聖なものとして扱った」（三輪茂雄 1978）という。佐渡では葬式の際に座敷で石臼を転がす除魔の風俗がある。使い古した石臼を廃棄処分するときは、「魂ぬき」といってゲンノウなどで二つ割りにして捨てる例が全国的にある。また、茶臼については、茶席の主人が自ら茶を磨くことが良いこととされ、茶人は愛玩の茶臼を持っていたという（同前）。したがって、使い古した石臼や故人が愛玩した茶臼は、割るなり傷つけるなどして墓域に投棄することがあったのである。

２　生産地と石工、および石材

四賀地区では 14 世紀前半の製作として３基、14 世紀後半の製作として３基の石塔を見出している。大型であること、小川層砂岩や白色の安山岩（溶結凝灰岩の可能性もある）などの軟質石材を使用していることが特徴である。これは全国的な傾向として指摘されていて、地元の石材を使い、遠方から石工が出張・滞在して製作したと考えられている。

それが、14 世紀末、応永年間（1394 ～ 1428）ころから石塔の小型化と石材の多孔質安山岩への統一が始まる。前述のとおり多孔質安山岩は東信の浅間山麓に一般的な石材で、地表に噴出した溶岩が気泡を内在したまま急速に固まった岩石である。東信では焼石とも呼ばれる。四賀地区は虚空蔵山が安山岩の岩塊ではあるが、気泡を含まない重い安山岩である。この東信の軽くて加工しやすい多孔質安山岩を用い、全体を小型化し、さらに底から重量軽減孔を穿った石塔が、部材に分けて牛馬の背に振り分けられ四賀地区に運び込まれたと考えられる。生産地は地蔵峠を越えて近い上田・小県方面であろう。

それが 15 世紀後半になると量産が進んだと思われ、工作は粗くなり、宝篋印塔の屋蓋は扁平さが増し、塔身の幅は 15cm 程度とさらに小型化する。その一方で、硬質砂岩製の五輪塔や宝篋印塔の基礎などが現われる。工作の精度は良くない。地元の石工によるコピー製品と考えられる。それも 16 世紀前半には消滅し、中世石塔の終焉期を迎える。おそらく戦国時代の戦乱によるものと考えられる。以上は全国的な傾向として指摘されているところで、その状況は四賀地区周辺にもそのまま当てはまる。

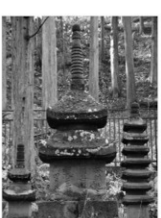


写真３

写真４

写真５

写真６

3　中世石塔の終焉と伝世の経緯

四賀地区周辺の中世石塔には完形品が少なく部材ばかりで、当初の姿を保ってるものが極めて少ない。この点については、石塔に対する信仰がいったん途絶えたことを意味する。その原因としては第一に、土砂崩れなど自然災害で山際の墓域が埋まり、その後農地の耕作などで出土したものが拾われた場合が考えられる。第二としては、造立者の一族が戦などによって滅びたり、逃亡していなくなり、石塔が放棄された場合である。第三としては、造立者の一族が存続したとしても、墓地を改装したり「墓じまい」するために、古い石塔を「魂抜き」にして放棄し埋めたものが、再び出土した場合も考えられる。

造立者の一族がいなくなり、その跡に新たな住民が入り墓地を利用する場合は、古い石塔は破壊せず墓域の奥に積み上げておく例がみられる。また、造立者の一族が存続しても墓じまいにする場合は、宝篋印塔の隅飾を打ち欠くなどの破壊行為が、上田市の日向畑遺跡（真田町教育委員会 1973）などにみられる。

四賀地区において造立者の一族がいなくなる場合には、歴史的に二つの場面が考えられる。一つは天文22年（1553）武田晴信（信玄）による刈谷原攻めの際、海野（会田）氏が武田に降った時（高白斎記）、もう一つは天正10年（1582）武田氏が滅亡した後、旧領を回復した小笠原氏によって会田氏が滅ぼされた時である。この頃は中世石塔の終焉期を経て、近世石塔の造立が始まった時期でもあり、地域住民の入れ替わりと相俟って情況が一新された変革期でもあった。

4　多宝塔の発見

今回の調査で四賀地区から4基の多宝塔が確認されたことの意義は大きい。

石田茂作は『日本仏塔の研究』（石田茂作 1974）の中で、「多宝塔には、石造のもの（中略）等もあるが、その遺例は甚だ少ない」として、全国から石造の11例をあげ、「これまで私が聞いている石造多宝塔の総てである」としている。そのうち長野県から常楽寺石造多宝塔（写真3）、信濃国分寺石造多宝塔（写真4）、大島屋石造多宝塔（以上は上田市）の3例をあげ、いずれも鎌倉時代の製作としている。弘長2年（1262）銘の常楽寺多宝塔は昭和36年に国の重要文化財に、信濃国分寺の多宝塔も昭和46年に上田市の文化財に指定されている。

大島屋石造多宝塔は、大正13年(1924)別所温泉（上田市）の大島屋旅館の裏山から多数の石塔類が出土し、翌年上小教育会に講演に訪れた天沼俊一によって組まれた写真が知られている（上田市立博物館　1984）。この石塔類は昭和戦前に県外に流出してしまったが、戦後、常楽寺や地元の篤学家の尽力によって里帰りし、現在、常楽寺石造多宝塔の脇に、多宝塔2基と多層塔2基が安置されている。天沼はこの多宝塔を「平安時代の逸品」と評し、石田はそれに疑問を呈して鎌倉時代としたが、現代の年代観からすれば、小型であること、軒が反っていること、軒端の切れが内傾していることなどから、製作は14世紀後半以降の南北朝～室町時代の製作と判断される。

以上がこれまでの石造多宝塔に関する知見であったが、これは石造物に関する研究が「石造美術」と称され、おもに完形品を対象としていた時代のものであった。それに対して現在は「石造文化財」として部材に至るまでに研究対象を広げており、多宝塔についても新たな発見が報告されるようになった。

福澤邦夫は昭和61年に東筑摩郡麻績村海善寺の多宝塔（写真5）を実測し、凝灰岩製の鎌倉中期（13世紀後半）の作として麻績村に報告した。その後、浜野は長野県中信地区の中世石造物調査を行い、四賀地区板場沢屋の金子家墓地に中型多宝塔、西宮の久保家墓地に小型多宝塔の下層屋根を発見し、『信濃』に報告した（浜野安則 2010）。そして今回の調査により新たに、板場沢屋の金子家墓地と両瀬の川久保家墓地でそれぞれ小型多宝塔の下層屋根の発見につながったのである。

写真7

部材であるために、五輪塔などの他の部材に紛れて確認されなかった小型多宝塔であるが、下層屋根の饅頭型に特徴があり、その点に注目すれば発見はたやすい。これまでの長野県内の調査からは、長野市小川小根山額塚堂、上田市信濃国分寺境内池（2基）、北佐久郡立科町津金寺（4基）、

佐久市望月町城光院（写真６）、佐久市望月町月輪院跡、松本市岡田矢諸観音堂（旧普門院）、茅野市諏訪大社上社前宮の７か所から 11 基分の下層屋根を確認している。その中でも松本市岡田矢諸観音堂（写真７）のものは砂岩の粗製品で、16 世紀前半の地元作と推定される。それ以外はいずれも多孔質安山岩製で、東信の佐久から小県のいずれかの工房で製作されていたとみられる。上田・常楽寺の多宝塔を倣った小型多宝塔が 14 世紀後半から少なくとも 15 世紀後半までの長期間、数はさほど多くはないがつくり続けられていたのである。

こうした小型多宝塔について他県からの報告をまだ知らないが、なぜ長野県内に多いのかは、単なる造立者（施主）の好みなのか、あるいは真言律宗など宗派の問題なのか、今後研究を深めたいと思っている。

写真８

5　単制無縫塔の発見

保福寺の無縫塔は完形であるばかりでなく、日本に無縫塔が発生した鎌倉時代の重制･単制の形式のうち、初期の単制の姿をよく残していて貴重である。しかも、鎌倉中期に中国の宋から渡来し鎌倉･建長寺を開いた、臨済宗の蘭渓道隆の開山を伝える保福寺に伝来したことは歴史的意義を感じる。蘭渓道隆は上田・安楽寺開山の樵谷惟遷とは深い交流があり、長野県内で蘭渓道隆を開山としている寺はほかに、四賀会田の長安寺（松本市）、法華寺（諏訪市）、建福寺（伊那市高遠町）、西岸寺（上伊那郡飯島町）、実際寺（同中川村）がある。四賀地区は古代、東山道が保福寺峠を抜け、また北陸支道が分岐している交通の要衝であった。そこに保福寺と長安寺という臨済宗の寺院が２か寺も存在することは不思議なことである。保福寺の寺伝によると、保福寺は 15 世紀初頭に衰え、16 世紀初頭には曹洞宗に改宗されて中興されたというので、空白の１世紀に臨済宗の法灯は長安寺に移ったと考えられる。長安寺には蘭渓道隆の頂像とされる木造倚像が伝わり、殿村遺跡の発掘ではさまざまな茶道具が出土している。喫茶を含む臨済宗文化が会田氏一族の庇護の下に、保福寺から長安寺に移ったものと考えられる。

6　一結衆による集団造塔

大型で塔内が中空の宝篋印塔は「一結衆」による集団によって造立された場合が多い。勧進僧の仲介により念仏講などに結縁したり、一族で結衆した人々が集団で造塔するもので、塔内の空洞を蔵骨器と考え、亡くなった人から遺骨の一部や遺髪・爪などを随時投げ入れるものである。その意味では逆修供養塔の性格をもつ。14 世紀後半から 15 世紀前半までに盛行したようで、その後個人の供養塔や墓塔に変わっていった。一結衆の造塔である旨の銘文や、結縁した人々の道号・戒名の結縁交名があり、それと知ることができる。

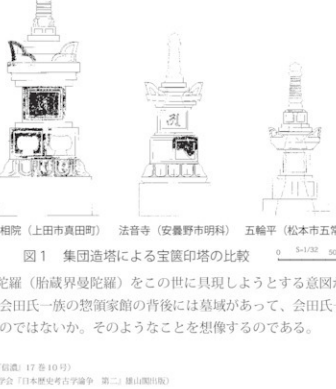
貞治６年（1367）銘の実相院宝篋印塔（長野県宝・上田市真田町・写真８）は、塔身に「一結□衆」の銘文を刻む。高さ２m を超える安山岩製の大型塔で、住職の話では中は空洞になっているという。真田町には実相院塔と類似した大型の宝篋印塔に、貞治５年（1366）銘の中原宝篋印塔（「大檀那道教」銘）、応永 10 年（1403）銘の弾正塚宝篋印塔（伝半田弾正墓）の２基がある。内部の空洞や一結衆によるとの銘文は確認されていないが、集団による造塔ではないかと考えられる。千曲市若宮の佐良志奈神社宝篋印塔(砂岩質凝灰岩製塔）には永和２年（1379）の年紀と「契約結衆四十五人」の銘文を刻む。長野市・善光寺の応永４年（1397）銘の善光寺宝篋印塔（西塔・凝灰岩製）には、結縁した 21 人の連名が刻まれている。

今回の調査で中北山五輪平の宝篋印塔と 明科塔ノ原法音寺の宝篋印塔が一結衆による造塔と判断された。五輪平塔は銘文はないが中が空洞であり、法音寺塔は中が空洞で、基礎に「沙弥□□」「沙弥□□」と刻まれた結縁交名が読める。ともに 14 世紀後半の製作と考えられ、中世石塔が希薄な中信地区においても、時代の流行であった集団造塔が行われていたことを示す貴重な例が確認できた（図１）。

7　結びにかえて

以上の中世石塔に対する考察から四賀地区周辺の歴史的景観を再現してみると、虚空蔵山を背景とした山

麓の所々に小規模な仏堂が建ち、それを取り囲むように石塔が立ち並び、その背後の山中に火葬施設を含む墓域があるという景観が描ける。当然その周辺に石塔造立者一族の屋敷があったのであろう。しかし、現在のところ中世石塔がみつかっていない主体部の殿村遺跡周辺では、景観をイメージすることは難しい。しかし考えてみれば、殿村遺跡は、北に知見寺（廣田寺の前身）、南に補陀寺、東に長安寺という中世寺院が取り囲んでいる。西は本来、現在北に位置する無量寺ではなかったかと思う。それぞれの寺の本尊は変わってしまったが、この寺院配置は北の虚空蔵山に抱かれ、南には海上の補陀落山を望み、東は薬師（または阿閦）、西は阿弥陀を配する虚空蔵曼陀羅（胎蔵界曼陀羅）をこの世に具現しようとする意図があったのではないだろうか。その中心に位置する会田氏一族の惣領家館の背後には墓域があって、会田氏一族の惣供養塔たる大型の宝篋印塔が屹立していたのではないか。そのようなことを想像するのである。



実相院（上田市真田町）　法音寺（安曇野市明科）　五輪平（松本市五常）

図１　集団造塔による宝篋印塔の比較

引用・参考文献

宮下真澄　1965「東信地方における中世石造塔婆の様式手法の推移について」（『信濃』17 巻 10 号）
日野一郎　1968「北信濃及び天天竜流域における宝篋印塔形式」（日本歴史考古学会『日本歴史考古学論争　第二』雄山閣出版）
柳田国男　1969「建神」（『山島民譚集』東洋文庫 137・平凡社）
真田町教育委員会　1973「真田町百体観音跡　発掘調査報告書」（真田町教育委員会）
川勝政太郎　1978「日本石造美術辞典」（東京堂出版）
四賀村誌編纂会　1978「四賀村誌」（四賀村役場）
三輪茂雄　1978「ものと人間の文化史 25・石」（法政大学出版局）
明科町史編さん会　1981「明科の石造文化財」（明科町教育委員会）
明科町史編纂会　1984「明科町史 上巻」（明科町史編纂会）
石田茂作監修　1984「新版仏教考古講座　第三巻塔・塔婆」（雄山閣出版）
上田市立博物館　1984「郷土の文化財　石造物」（上田市立博物館）
市川浩一　1991「福聚山鹿田寺」（福聚山鹿田寺）
櫻井松夫　1992「弘沢宝篋印塔の考察」（『信濃』44 巻 8 号）
四賀村の石造文化財編集委員会　1992「四賀村の石造文化財」（同刊行会）
四賀村の社寺文化財誌編集委員会　1997「四賀村の社寺文化財誌」（四賀村教育委員会）
静岡県考古学会　1997「静岡県における中世墓」（静岡県考古学会）
貴　直子　1997「石塔の変遷―中遠地方を中心として―」（静岡県における中世墓）
埼玉県立歴史資料館　1998「埼玉県中世石造遺物調査報告書 1 本文・資料編 Ⅱ岡阪編」（埼玉県ミ育委員会）
長野県理蔵文化財センター　1998「対面所遺跡」（『上信自動車道理蔵文化財発掘調査報告書 14 』）
長野県理蔵文化財センター　1999「観音平経塚」（『上信自動車道理蔵文化財発掘調査報告書 21 』）
小山丈夫　2000「石造文化財」（長野市誌編さん委員会『長野市誌』第 2 巻第 5 章第 3 節・長野市）
長野県理蔵文化財センター　2000「松原遺跡　古代・中世　本文編・図版編」（『上信自動車道理蔵文化財発掘調査報告書 6 』）
福澤邦夫　2006「信濃善光寺平所在の特異な宝篋印塔調査報告」（『民俗文化』第 510 号外・滋賀民俗学会）
福澤邦夫　2007「廃善福寺彩石宝篋印塔・東昌寺浦野氏宝篋印塔」（『史迹と美術』第 773 号）
山田　均　2008「中世石造物の研究」（日本史史料研究会研究選書 2・日本史史料研究会面部）
河西克造　2009「甲信の中世墓」（狭川真一編著『日本の中世墓』高志書院）
甲斐市史編さん委員会　2009「甲斐市史 第 6 巻民俗・建築・石造文化財」（甲斐市）
斎藤　弘　2009「北関東の中世墓」（狭川真一編著『日本の中世墓』高志書院）
櫻井松夫　2009「津金寺の歴史」（津金寺・津金寺の歴史刊行会）
浜野安朗　2010「長野県中信地区の中世石造物」（『信濃』62 巻 1 号）
井原今朝男　2011「村松の宝篋印塔」（長野県宝等候補物件調査票）
岡本智子　2011「無縁塔の受容と展開」（藤澤典彦『石造物の研究』高志書院）
石造文化財調査研究所　2011「石造文化への招待」（考古調査ハンドブック 5・ニューサイエンス社）
藤澤典彦　2011「宝篋印塔形態論」（藤澤典彦『石造物の研究』高志書院）
松井一明　2011「武士の一族墓の成立と展開」（藤澤典彦『石造物の研究』高志書院）
松本市教育委員会　2011「殿村遺跡―第 1 次調査概報」（松本市文化財調査報告 No.208）
栗岡眞理子　2012「北関東」（狭川真一・松井一明編『中世石塔の考古学』高志書院）
狭川真一・松井一明編　2012「中世石塔の考古学」（高志書院）
佐藤亜聖　2012「石造物と石材」（狭川真一・松井一明編『中世石塔の考古学』高志書院）
日本石造物辞典編集委員会　2012「日本石造物辞典」（吉川弘文館）
刀禰郡未　2012「丹波・丹後地方の麻呂子親王伝説にまつわる七仏薬師像」（『帝塚山大学大学院人文科学研究科紀要』第 14 号）
石田茂作　2016「日本仏塔の研究」（吉川弘文館・2016 年復刻）
松崎憲三　2017「長野県北部の大姥様信仰―虫倉山周辺と大町市域を中心に―」（『信濃』69 巻 1 号）

付表　調査石造物一覧

地点・地区	番号	石造物名称	器材名	高(cm)	幅(cm)	石材	時期	備考
01 赤堀町 矢柱・小柳家（鹿部地区）	01－01	宝塔印塔	相輪	26.0	11.8	安山岩	15世紀前半	
	01－02	宝塔印塔	屋蓋	15.1	28.6	安山岩	15世紀前半	
	01－03	宝塔印塔	基礎	12.9	32.3	安山岩	15世紀前半	反花を初めとする四国地区に多いタイプ
	01－04	宝塔印塔	相輪	25.2	10.0	安山岩	15世紀前半	
	01－05	宝塔印塔	屋蓋	14.9	24.2	安山岩	15世紀前半	小型だが標準作とみなされる
02 板場沢原 金子家墓地（会田地区）	02－01	五輪塔	空風輪	21.0	17.0	小川砂砂岩	15世紀後半	地方色（関東系）が顕著
	02－02	五輪塔	水輪	13.0	21.5	小川砂砂岩	15世紀後半	やや扁平（関東型）
	02－03	多宝塔	下層屋根	30.5	40.4	小川砂砂岩	14世紀後半	三層塔婆型
	02－04	多宝塔	基礎輪郭	22.3	32.8	小川砂砂岩	14世紀後半	雨露に長く受けたように赤く変色
	02－05	多宝塔	基礎	27.5	40.2	小川砂砂岩	14世紀後半	塔婆さよりも立ちが良い
	02－06	五輪塔	空風輪	20.4	14.8	小川砂砂岩	15世紀後半	地方色（関東系）
	02－07	宝塔印塔	屋蓋	14.8	27.3	安山岩	15世紀前半	
	02－08	宝塔印塔	基礎	16.2	30.8	安山岩	15世紀前半	
	02－09	宝塔印塔	基礎	20.3	37.2	安山岩	15世紀前半	02－08をのせる素朴の基礎
	02－10	宝塔印塔	相輪	11.8	9.4	安山岩	15世紀前半	
	02－11	宝塔印塔	屋蓋	13.5	23.5	安山岩	15世紀前半	
	02－12	宝塔印塔	基礎	9.5	26.5	安山岩	15世紀前半	素朴の基礎、たちがやや低い
	02－13	宝塔印塔	基礎	9.0	35.8	小川砂砂岩	15世紀前半	素朴の基礎
	02－14	五輪塔	空風輪	13.5	16.3	安山岩	15世紀前半	伊豆系の五輪塔、形が整う
	02－15	五輪塔	火輪	12.5	22.0	小川砂砂岩	15世紀後半	地方色が強い
	02－16	五輪塔	地輪	14.0	21.6	硬質砂岩か	15世紀後半	
	02－17	五輪塔	空風輪	16.5	12.0	小川砂砂岩	15世紀後半	地方色（関東系）
	02－18	五輪塔か	基礎か	7.5	23.5	硬質砂岩か	不明	自然石を転用した五輪塔などを置いたものか
	02－19	宝塔印塔	相輪	7.0	9.5	安山岩	15世紀前半	宝珠、伊豆系
	02－20	宝塔印塔	塔身	9.5	11.0	安山岩	15世紀前半	
	02－21	多宝塔	下層屋根	16.5	27.0	小川砂砂岩	14世紀後半	02－03～05の原塔と考えられる
	02－22	五輪塔	空風輪	13.5	11.6	安山岩	15世紀後半	伊豆系
	02－23	五輪塔	火輪	12.0	21.0	小川砂砂岩	15世紀後半	善木村木沢中の文明8（1484）と同タイプ
	02－24	五輪塔	火輪	16.5	32.0	小川砂砂岩	15世紀後半	地方色が強い
	02－25	宝塔印塔	相輪	13.5	10.3	安山岩	15世紀前半	
	02－28	五輪塔	空風輪	22.5	14.4	小川砂砂岩	15世紀後半	地方色（関東型）
	02－29	宝塔印塔	相輪	8.5	9.4	安山岩	15世紀前半	
	02－30	五輪塔	空風輪	28.0	13.7	小川砂砂岩	15世紀後半	
	02－31	五輪塔	水輪	15.5	15.4	小川砂砂岩	不明	自然石の転用か
	02－32	五輪塔	水輪	14.3	11.7	安山岩	15世紀前半	ナツメ形水輪の残欠
03 板場 小口家墓地（会田地区）	03－01	宝塔印塔	相輪	15.5	8.4	安山岩	15世紀後半	
	03－02	五輪塔	火輪	7.8	20.0	硬質砂岩	15世紀後半	地方色の強い五輪塔
	03－04	宝塔印塔	塔身	11.1	14.1	安山岩	15世紀前半	
	03－06	宝塔印塔	相輪	16.9	9.4	安山岩	15世紀前半	
	03－09	宝塔印塔	基礎	10.0	20.2	安山岩	15世紀前半	
	03－11	五輪塔	水輪	9.5	12.1	硬質砂岩	中世	水輪残欠
	03－12	三角五輪塔	火輪	9.4	18.9	硬質砂岩	中世	火輪の残欠か
	03－13	石行		9.5	10.4	安山岩	中世	
04 矢久木村 西家墓（中川地区）	04－01	宝塔印塔	相輪	15.0	10.1	安山岩	15世紀後半	
	04－02	宝塔印塔	屋蓋	13.2	23.5	安山岩	15世紀後半	
	04－03	宝塔印塔	屋蓋	14.0	27.8	安山岩	15世紀後半	
	04－04	五輪塔	火輪	13.1	26.1	安山岩	14世紀後半	つくば市小田城跡（15世紀）が同タイプ
	04－05	宝塔印塔	基礎	9.7	21.7	安山岩	15世紀後半	
	04－06	宝塔印塔	基礎	17.6	31.2	安山岩	15世紀後半	
05 高瀬上手 川久保家墓地（中川地区）	05－01	宝塔印塔	相輪	8.6	7.4	安山岩	15世紀後半	
	05－02	多宝塔	下層屋根	14.9	19.9	安山岩	15世紀後半	基礎部の形変か
	05－03	宝塔印塔	屋蓋	24.7	34.1	安山岩	15世紀後半	
	05－04	五輪塔	水輪	16.2	27.3	安山岩	15世紀後半	
	05－05	宝塔印塔	基礎	18.2	29.6	安山岩	16世紀後半	紀年銘「天文二年」か
06 松山田屋 内藤家（中川地区）	06－01	薬師如来坐像		35.4	35.7	安山岩	15世紀後半	
07 会田本町 園田寺墓地（会田地区）	07－01	宝塔印塔	相輪	21.0	11.5	安山岩	15世紀後半	
	07－02	宝塔印塔	屋蓋	14.4	25.8	安山岩	15世紀後半	
	07－03	宝塔印塔	塔身	12.5	14.7	安山岩	15世紀後半	
	07－04	板碑		33.5	20.5	緑泥片岩	14世紀	武蔵型板碑
08 会田田井堂 無量寺墓地（会田地区）	08－01	宝塔印塔	相輪	9.0	9.5	安山岩	15世紀後半	
	08－02	宝塔印塔	屋蓋	14.1	24.2	安山岩	15世紀後半	
	08－03	宝塔印塔	相輪	12.6	6.8	安山岩	15世紀後半	
	08－04	宝塔印塔	屋蓋	15.3	27.5	安山岩	15世紀後半	
	08－05	五輪塔	空風輪	16.1	13.4	安山岩	15世紀後半	地方色が強い・タイプ
	08－13	無縫塔	塔身	89.1	43.2	硬質砂岩	16世紀後半	
	08－14	無縫塔	請座	16.2	39.1	硬質砂岩	16世紀後半	
	08－15	無縫塔	塔身	86.0	42.0	硬質砂岩	16世紀	
09 会田本町 にごみ墓地（会田地区）	09－01	五輪塔	空風輪	22.3	18.0	安山岩	15世紀後半	地方色が強い
	09－02	宝塔印塔	塔身	13.7	15.8	安山岩	15世紀後半	
	09－03	宝塔印塔	基礎	19.5	33.9	安山岩	15世紀後半	
	09－04	宝塔印塔	塔身	13.3	15.1	安山岩	15世紀後半	
	09－05	宝塔印塔	基礎	17.3	29.4	安山岩	15世紀後半	
	09－06	宝塔印塔	塔身	13.0	15.4	安山岩	15世紀後半	
	09－07	宝塔印塔	相輪	20.9	11.6	安山岩	15世紀後半	
	09－08	宝塔印塔	相輪	7.7	10.5	安山岩	15世紀後半	
	09－09	宝塔印塔	相輪	18.1	10.0	安山岩	15世紀後半	
	09－10	宝塔印塔	相輪	16.9	10.5	安山岩	15世紀後半	09－11と接合、両頂を高くつくる
	09－11	宝塔印塔	相輪	14.0	9.5	安山岩	15世紀後半	09－10と接合
	09－12	五輪塔	火輪	13.0	26.1	硬質砂岩	15世紀後半	
	09－13	宝塔印塔	基礎	12.6	21.7	安山岩	16世紀後半	完成前に放棄したものと思われる
	09－14	宝塔印塔	基礎	17.2	33.0	硬質砂岩か	15世紀後半	搬入された高級品であったか
	09－15	五輪塔	火輪か	17.5	23.38	硬質砂岩	中世	
	09－16	五輪塔	地輪か	15.3	24.6	小川砂砂岩	中世	
	09－17	板碑		55.3	21.0	緑泥片岩	16世紀	墓内家墓地移動の際に出土した
10 西沢 久保家墓地（五覚地区）	10－01	宝塔印塔	相輪	18.3	13.7	安山岩	15世紀後半	宝塔印塔の相輪とは限らない
	10－02	多宝塔	下層屋根	12.9	27.2	安山岩	15世紀後半	赤堀の多宝塔として東国から搬入されたか
	10－03	五輪塔	水輪	15.2	25.3	安山岩	15世紀後半	
	10－04	茶臼	下臼	10.6	28.9	安山岩	15世紀	受臼は一方を欠いて片口とする
	10－05	五輪塔	地輪	9.5	30.0	安山岩	15世紀後半	地輪としては立ちが低い

地点・地区	番号	石造物名称	部材名	高 (cm)	幅 (cm)	石材	時期	備考
10 西区 久保家墓地（五葉地区）	10－06	五輪塔	宝珠	11.7	14.8	硬質砂岩	15 世紀後半	自然石の利用、底部のみが丁寧に加工
	10－07	宝塔印塔	相輪	18.5	8.7	安山岩	15 世紀後半	
	10－08	宝塔印塔	相輪	20.8	11.5	安山岩	15 世紀前半	
	10－09	五輪塔	空風輪	23.7	17.3	安山岩	15 世紀後半	やや大型の五輪塔と考えられる
	10－10	宝塔印塔	屋蓋	16.6	25.3	安山岩	15 世紀後半	
	10－11	宝塔印塔	塔身	12.8	14.6	安山岩	15 世紀後半	
	10－12	石臼	上臼	11.4	11.4	安山岩	15 世紀	
	10－13	宝塔印塔	相輪	6.0	8.1	安山岩	15 世紀後半	
	10－14・15	宝塔印塔	相輪	18.6	9.6	安山岩	15 世紀後半	
	10－16	宝塔印塔	屋蓋	13.1	25.2	安山岩	15 世紀後半	正信銘型
	10－17	宝塔印塔	塔身	16.9	16.3	安山岩	15 世紀後半	転用品
	10－18・19	宝塔印塔	屋蓋	13.4	23.8	安山岩	15 世紀後半	
	10－20	五輪塔	空風輪	16.5	13.5	安山岩	15 世紀後半	
11 西区 仙台堂墓地（五葉地区）	11－01	五輪塔	空風輪	20.2	17.3	安山岩	15 世紀後半	
	11－02	宝塔印塔	相輪	13.7	14.5	安山岩	15 世紀後半	
	11－03	宝塔印塔	屋蓋	14.0	26.1	安山岩	15 世紀後半	
	11－04	宝塔印塔	塔身	13.5	14.6	安山岩	15 世紀後半	
	11－05	五輪塔	空風輪	23.2	18.0	安山岩	15 世紀後半	
	11－06	宝塔印塔	基礎	9.5	16.8	安山岩	15 世紀後半	
12 西区 伊在家墓地（五葉地区）	12－01	宝塔印塔	相輪	14.5	7.8	安山岩	15 世紀後半	
	12－02	宝塔印塔	屋蓋	15.7	26.6	安山岩	15 世紀後半	正信銘型の始まりか
	12－03	宝塔印塔	基礎	13.7	19.7	硬質砂岩	16 世紀前半	地元のわた山安山岩製を表出するもの
	12－04	五輪塔	水輪	16.2	26.7	小田原砂岩	15 世紀後半	
	12－05	宝塔印塔	相輪	19.6	9.4	安山岩	15 世紀後半	
	12－06	宝塔印塔	屋蓋	18.1	28.5	安山岩	15 世紀後半	正信銘型
	12－07	宝塔印塔	基礎	12.5	19.9	硬質砂岩	16 世紀前半	12－03 と同様の砂岩製
	12－08	宝塔印塔	基礎	10.3	23.0	安山岩	15 世紀後半	五輪塔の地輪の可能性もある
	12－09	宝塔印塔	相輪	17.6	8.7	安山岩	15 世紀後半	
	12－10	宝塔印塔	基礎	13.1	20.0	安山岩	16 世紀前半	中世宝塔印塔の終末期の傾向
13 井戸 降家墓（五葉地区）	13－01	宝塔印塔	相輪	17.6	10.3	安山岩	15 世紀後半	
	13－02	宝塔印塔	屋蓋	16.6	27.8	安山岩	15 世紀後半	
	13－03	宝塔印塔	屋蓋	13.7	26.5	安山岩	15 世紀後半	
14 中北山 五輪平（五葉地区）	14－01	宝塔印塔	屋蓋	12.0	20.0	安山岩	14 世紀後半	
	14－02	宝塔印塔	基礎	11.7	20.0	硬質砂岩	15 世紀後半	
	14－03	宝塔印塔	屋蓋	21.0	42.1	安山岩	14 世紀後半	
	14－04	宝塔印塔	基礎	19.9	38.0	安山岩	14 世紀後半	
	14－05	宝塔印塔	基礎		54.5	硬質砂岩か	不明	地下に納骨施設があると思われる
	14－06	五輪塔	空風輪	19.7	15.8	安山岩	15 世紀後半	
	14－07	宝塔印塔	相輪	12.3	11.1	安山岩	15 世紀後半	
	14－08	宝塔印塔	相輪	16.0	9.3	安山岩	15 世紀後半	
	14－09	宝塔印塔	相輪	14.8	9.6	安山岩	15 世紀後半	
	14－10	宝塔印塔	相輪	16.8	9.3	安山岩	15 世紀後半	
	14－11	宝塔印塔	塔身	10.5	13.0	安山岩	15 世紀後半	
	14－12	宝塔印塔	屋蓋	10.2	14.8	安山岩	15 世紀後半	
	14－13	宝塔印塔	基礎	9.8	17.6	安山岩	15 世紀後半	
16 宮本 鼎橋家（会田地区）	16－01	宝塔印塔	屋蓋	10.6	13.0	安山岩	15 世紀後半	15 世紀後半の典型
17 藤本 久保家（五葉地区）	17－04	宝塔印塔	相輪	20.2	11.3	安山岩	15 世紀後半	
	17－05	宝塔印塔	屋蓋	12.8	23.3	安山岩	15 世紀後半	
	17－06	宝塔印塔	塔身	10.7	16.3	安山岩	15 世紀後半	
18 会田新町 長安寺（会田地区）	18－01	五輪塔	空風輪	17.6	15.2	安山岩	15 世紀後半	
19 向瀬 中沢家墓地 （中山地区）	19－01	五輪塔	空輪	16.6	18.2	安山岩	15 世紀後半	中世氏による先祖はかつて小船から移り住んだという。
	19－02	五輪塔	水輪	15.4	28.8	安山岩	15 世紀後半	
	19－03	五輪塔	水輪	23.1	34.3	小田原砂岩	14 世紀後半	小田原砂岩の輸入品
	19－04	五輪塔	地輪	20.9	30.9	小田原砂岩	14 世紀後半	1回目使用の輸出用の五輪塔の流れを汲む
20 岩石地区 藤本家（中山地区）	20－01	宝塔印塔	相輪	30.8	11.8	安山岩	15 世紀後半	各部のバランスが良い標準作
21 保福寺町 保福寺（御嶽地区）	21－01	無縫塔	塔身	29.2	28.6	安山岩	14 世紀後半	表面は研磨仕上げ
	21－02	無縫塔	沈香	15.0	38.3	砂岩か	14 世紀後半	
	21－03	無縫塔	基礎	11.7	35.1	安山岩	14 世紀後半	法花との関係不明あった痕跡はない
	21－04	無縫塔	塔身	30.0	29.6	安山岩	一中世	表面は研磨仕上げ中世的
22 保福寺町 山本家（御嶽地区）	22－01	宝塔印塔	相輪	28.5	10.4	安山岩	15 世紀後半	輪郭を高くつくる
23 七新中村 武川家（御嶽地区）	23－01	五輪塔	空風輪	22.7	18.3	安山岩	15 世紀後半	
	23－02	五輪塔	空風輪	15.5	9.1	安山岩	15 世紀後半	
24 夜瀬大門 久保田家墓地（中川地区）	24－01	宝塔印塔	相輪	14.5	10.4	安山岩	15 世紀後半	
	24－02	宝塔印塔	屋蓋	14.4	22.9	安山岩	15 世紀後半	四隅は入念的にていているように思われる
25 夜瀬大門　福田家 福田寺（中川地区）	25－01	宝塔印塔	基礎	31.6	21.1	安山岩	15 世紀前半	
26 福田川向 野村家墓地（中川地区）	26－01	宝塔印塔	屋蓋	12.8	22.2	安山岩	15 世紀後半	四隅は入念的にていているように思われる
27 福田川 草間家（中川地区）	27－01	宝塔印塔	屋蓋	18.0	26.4	安山岩	15 世紀前半	典型的な信銘型
28 会方 上條家（中川地区）	28－01	宝塔印塔	相輪	15.0	10.4	安山岩	15 世紀後半	棺の飾りとして調かれている。解与「あぜち」
29 矢久辺沢新 （中川地区）	29－01	宝塔印塔	相輪	15.8	10.4	安山岩	15 世紀後半	相輪の相輪の可能性もある
	29－02	名標塔	屋根	23.0	9.4	安山岩	15 世紀後半	
30 福田川向 横内家墓地（中川地区）	30－01	五輪塔	空風輪	26.7	20.3	安山岩	15 世紀前半	
31 明科大足清水 光久寺	31－01	宝塔印塔	相輪	14.0	8.9	安山岩	15 世紀後半	
	31－02	宝塔印塔	屋蓋	16.4	26.8	安山岩	15 世紀後半	
	31－03	宝塔印塔	塔身	16.3	13.1	安山岩	15 世紀後半	
	31－04	宝塔印塔	基礎	19.1	28.8	安山岩	15 世紀後半	
	31－05	宝塔印塔	相輪	13.4	9.5	安山岩	15 世紀後半	
	31－06	宝塔印塔	相輪	17.9	8.5	安山岩	15 世紀後半	
	31－07	五輪塔	火輪	15.3	23.2	安山岩	15 世紀後半	五輪塔のローカル化か
	31－08	五輪塔	水輪	14.0	20.6	安山岩	15 世紀後半	
	31－09	五輪塔	火輪	21.0	33.3	安山岩	15 世紀後半	
	31－10	五輪塔	水輪	21.2	31.7	安山岩	15 世紀後半	
32 明科原ノ原 法音寺	32－01	宝塔印塔	屋蓋	未計測	未計測	安山岩	14 世紀後半	凝灰岩か
	32－02	宝塔印塔	塔身	未計測	未計測	安山岩	14 世紀後半	凝灰岩か　一部二一部欠一の痕あり
	32－03	宝塔印塔	基礎	未計測	未計測	安山岩	14 世紀後半	凝灰岩か
	32－04	宝塔印塔	基礎	未計測	未計測	安山岩	14 世紀後半	凝灰岩か
33 明科北 宗林寺	33－01	宝塔印塔	相輪	13.0	6.2	安山岩	15 世紀後半	宝珠を手前に表す
	33－02	宝塔印塔	屋蓋	15.6	29.1	安山岩	15 世紀後半	
	33－03	宝塔印塔	塔身	12.8	15.5	安山岩	15 世紀後半	
	33－04	宝塔印塔	基礎	12.9	22.5	安山岩	15 世紀後半	
	33－05	宝塔印塔	屋蓋	15.5	27.5	安山岩	15 世紀後半	
36 明科原ノ原 王子原熊野	34－01	宝塔印塔	相輪	16.5	9.8	安山岩	15 世紀後半	諸説は複雑 8 ガで明確はない
	34－02	宝塔印塔	相輪	15.5	10.2	安山岩	15 世紀後半	
	34－03	宝塔印塔	相輪	12.5	8.5	安山岩	15 世紀後半	
	34－04	五輪塔	水輪	11.2	15.4	安山岩	15 世紀後半	自然石を水輪に転用したもの

松本市四賀地区の中世石造物

—殿村遺跡調査事業に係る調査報告書—

発行日　平成29年3月31日
発行者　松本市教育委員会
〒390-8620
長野県松本市丸の内3番7号
印　刷　双葉印刷有限会社